

尾崎喜八資料

第 15 号

特集 行人句抄・尾崎喜八の俳句

虚子俳句鑑賞	3
磐 梯	7
水原秋桜子『薩摩山菊』	10
祝詞に代えて	10
行人俳句・連句三巻・穂屋野歌仙	13
*	
「行人句抄」にそえて／伊藤海彦	23
尾崎喜八と俳句／渡辺 勝	24
風雅逍遙／坂本波之	27
行人連句 穂屋之歌仙／村野夏生	29
思い出の連句／小松崎爽青	33
種子蒔俳句会と尾崎先生／小林わたる	34
尾崎喜八と俳句—解説—／嘉納忠明	37
*	
尾崎喜八とフランスの作家たち その三／中原好文	44
研究会だより／尾崎栄子	47
一年のできごと・編集後記	48
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会

1999年9月



分水荘南座敷の尾崎夫妻
穂屋野歌仙・句会はここ
で行われた。

大穂島



らり鳴くや
雨後匂ひ立つ

行人句抄・尾崎喜八の俳句

——俳句鑑賞・連句——

本号特集「行人句抄・尾崎喜八の俳句」は、喜八の作句についての資料の、現時点で入手しうるものと網羅してある。本号特集と詩文集第7巻中「未消ゆるこころの波」「よみがえった句」によって、喜八の作句活動のほぼ全貌を知ることができるよう心がけた。ぜひご併読下さい。

戦後、喜八が俳句を発表する主要な場となつた「かびれ」、故大竹孤悠との関わりについて現主宰者の小松崎爽青氏から貴重な寄稿をいただいたのをはじめ、富士見時代の療養所、地元の方々との句会・作句の豊かな拡がりについての資料も収録できた。これによつて、当時の作句とその環境についての、かなり具体的なイメージを読み取つていただけることと思う。

俳句は、喜八の文学の中でも規模が小さく、喜八自身が詩・散文を本領としていたために研究の対象となりづらい分野である。そのため今後、今回のよろんな規模の調査、掲載の機会は無いものと判断し、あえて紙数を増やしても網羅的に、寄稿・転載を依頼し、まとめて見えた。

大竹孤悠の「該博な科学知識を土台とする明達な分析的解説の妥当さは、俳壇に曾つて例を見ない」という喜八の俳句観への評言を俟つまでもなく、富士見時代の喜八の作句活動には詩集『花咲ける孤独』に結晶する詩作との深い相関も感じられる。その意味で、これらは将来『花咲ける孤独』研究の貴重な傍証となりうる位置にあるとも言える。(石黒)

虚子俳句鑑賞

高浜虚子特輯の号が出る、ついては詩人から見た此の老大家の俳句の鑑賞を書いてくれといふのが、私に対する本誌編集部の所望だつた。しかし五・七・五といふ十七音の音律形式と、季節感をとほしての自然、生活及び人間感情の諷詠といふ事を其の不可欠の成立与件としてゐる此のユニークな文学を、よしんばそれが広義の詩の世界の中での一国土であるにしても、広く詩人の觀点に立つて批評し鑑賞するといふのは、ちよつと考へると面白いやうではあるが、実はいくらか無理な事でもあれば遣りにくく事もあり、又当の作者自身にしても、今さら余計な事をするものだと迷惑を感じるかも知れない。

そこで私としては、——たとへば木版画家の作品に面した洋画家が、木版芸術本来の約束なり制限なりをよく呑みこんだ上で前者の作品を批評し鑑賞するやうに——、やはり日本語十七音の形律と季節感の滲透とを二つの制限として約束としてゐる俳句文学への幾分の理解と充分な同情との上に立つて、今は此の老大家の作品を玩味してみたいと思ふ。そして特輯号の出るのは六月頃であらうから、句はいづれも夏の季のものの中から選ぶ事にする。

これは私の「マージナリヤ」である。高原の春の草の上、暖かい清らかな日光と、アル

バスの雪の思ひ出を運んで来るそよかぜと、時折の澄んだ蜜蜂の羽音の中でする、樂しくない事もない「余白への書き込み」である。

☆

白牡丹といふといへども紅ほのか

豊麗馥郁たる牡丹の中で最も氣品の高い白牡丹であり、凡そ近代の牡丹の句の中で自他共にゆるす秀句だと言へる。牡丹にも大小精粗いろいろあるが、此の白牡丹は極めて見事な、全く瑕瑾のない大輪で、しかも今や静かに其の最高潮にむかつて天成の美を展べつ、あるもののやうに思はれる。それは恐らく、其の柔かい純白な花びらの肉を透いてほのかに匂ふ「紅の訪なひ」を認めながら、おのれも亦ほのぼのと匂ふがやうな心地になつた作者の、その発見と歎賞とに自足した悠々たる叙法が生ましめるイメージであらう。初五の字余りと「いふといへども」のすらりとした中七音が、幅と深みとのある音感を持つた「紅ほのか」の座五に移つて行く運びには、李朝陶磁の清明と雅馴とに通ふおもむきがある。「紅」の字を「へに」と読まず、特に「こう」と読むやうに振仮名をしたのは、此の場合真に止むを得ざるに出た挙であらう。しかもそれ故、「紅」の字の呼び起こす色感と、「ほのか」と共に奏てる「こう」の音とによつて構成された此の座五の無垢のしらべこそ、全く此の一句を生かす光であると言はなくてはならない。

こんな桃色のほかには花が何も欲しがらない。

いので、それは花のためにとまつて空から笑みを注ぐのだらうか。

それが句のやうに鷹揚に消えて行くとき、優しくうけとめてやる天使等がゐるのだらうか。

と、あの素晴らしい「桃色のあぢさゐ」の詩の第二聯でリルケは書いてゐる。私の翻訳は拙いが、ドイツ語の原詩は晴れやかに甘美で実に見事だ。しかも同じやうに花を歌つた此の詩と虚子の句とを比較する気は勿論無いと同時に、日本語其物の箇有名な機能を慈しみながら造型された秀抜な一作品と、此のやうな西欧の詩人の勝れた作品とを等しく味ひ得る事を、寧ろ私は現代日本に生きる者の大いなる幸福の一つだと信じてゐる。

雲もゆき風も吹くなる幟かな

此の一見なんでもないやうな句が私に無量の感慨を起させた。幟はもちろん端午の節

句に、男の子を持つ家が屋外に立てる幟である。それは四月の末、五月の初めの、ほの暖かい碧い空の下に立つてゐる。その空を時を

り柔かに光る白い雲が過ぎ、その空間を夏近い南の風が思ひ出したやうに吹いて通る。さ

ういふ時をさういふ幟がはうばうに立つてゐる。何處かで桐の花が咲いてゐるかも知れない。燕も遠く翔けては翻つてゐるかも知れない。人々の営みの物音が、眼には見えぬ渦となつて町の空に昇つて行く。そして此の塵勞

を思はせる人の世の光景にたゞんで、おの

れに箇有名な運命と誰とも違ふ過去とを持つた人間が、「自分も亦なほ生きてゐるのだ」と、此の瞬間をしみじみといとほしむ……

然し、要するに「雲もゆき風も吹くなる」である。行く雲の下、吹く風に立つ幟である。そして此の二つの「も」と、「吹くなる」の措辞と、かすかな詠歎である「かな」との調べの中から、幟を契機としたさまざまの感慨も又真昼の哀愁も湧いて來るのである。

まことに俳句は余情をたふとむ文学、聯想を期待する文学、それを味ふ人の協力に待つところ極めて多い文学である。それ故作品を味ふ側としては体験と、教養と、詩的想像力との豊富なことが望ましく、然しさうかといつて余りに放縱な想像や立ち入つた穿鑿は好ましくない。それと同時に作者としては、おのれ一人だけで解つてゐるやうな突飛な表現や、畸形や、舌足らずや独善などは厳に慎まねばならないであらう。

そこで今私としては、自分の持つてゐるすべてを与へて、又収めて、此の一見淡々とした句の妙味に改めてむかふのである。

水打てば沈むが如し苔の花

苔類が植物学上花と呼ばれる器官を持つてゐない事は、作者を初めとして誰でも知つてゐる。そして古人が花と見たのは実は苔帽と称せられる物で、此の「苔」が若しも苔類中のスギゴケの仲間ならば、一見杉の葉のやうに上へ上へと密生した葉の間から抜き出した糸硝子のやうな柄の頂きに、無数の胞子を

をさめて着いてゐる太く短かい牛の角のやうな形をした袋の謂である事も恐らくは知つてゐよう。然しそれを今日の智識にも拘らずなほ花と見立てるのは全く俳諧的な美化で、樹下や薄鉢の中に群生してゐる彼等のイメージを現す言葉としても極めて印象的である。

この柔かに密生したスギゴケに水を打つ。

打つとは言つても頭からぎぶりと掛けるので

はなく、こまかい孔の如雨露から霧雨のやうにそゝぐのである。充分に水を吸つた葉の厚い敷物がふかふかと盛り上がる、絹糸のやうな柄に支へられた「花」のはうは零の重みで

うなだれる。盛り上がる葉とうなだれる花と。

それで、其の水に濡れてダイヤモンドの粉末を鏤めたやうに光つた無数の金褐色のつぶつ

ぶが、あたかも深い柔かい綾織の葉の間に沈みこむやうに見える。と、さういふのである。

真によい着眼と懇ろな觀察とから書き出された逸品であり、所謂写生句の最も純粹なものである。写生をたぶとぶ者と云はず、又それをなみする者と云はず、とにかく古往今來、誰が此の日常片隅の清涼の美に気がついたか。

十七音字の文学となつて提出されて見て初めで、此の知らずして過ごした微塵宇宙の詩美に心ある人は打たれるのである。

なつかしきあやめの水の行方かな

優艶で清楚さはまりもない、真になつかしい句ではある。

アヤメはノハナシヤウブと同属の野生植物で、や、湿めた山野や水辺に自生してゐる。

花の色は後者が赤味を帯びた紫いろをしてゐるのに、これは淡い碧紫色を呈してゐるのが普通である。此の句のアヤメも多分野生のもので、浅い緩やかな流のへりに幾株づつか集まつてところどころに咲いてゐるものと思はれる。もちろん其の茎や葉の根もとは水に漬かつてゐる。泥深い浅川の事だから水はいくらか濁つてゐる。然し濁つた水といふものは、それが静かな流をなして水上に河骨やオモダカが咲き、水と硝子とで出来たやうな蜻蛉が飛び、遠くで葭切が鳴いてゐたり、たまたまカハセミが輝く青と栗色の矢のやうに水面を掠めて飛んで行つたりする時には、まことに田園牧歌的な、親しみに満ちた、人をして子供心に帰らせるやうな眺めである。

然しかういふ一切の道具立てを背景のかなたへ押しやつて、(とは云へすつかり忘れはせずに)、此の一群のアヤメの花と、その根もとに花の色や姿を浮かべながら緩やかに綾をゑがいて流れる水、遠く夏野の果てへ幾曲りする其の行衛のなつかしまれる「あやめの水」とを心の眼前に布置する時、どんなに此の句そのものが懐しくロマンティックで丈け高く、しかも即物的な写生の力の強さ健かさを具へてゐるかが分かるのである。そして「ハツ橋に似し橋いや杜若」の句を成す此の作者が、此のあやめの水の行方をなつかしとなす心境と氣品とに私は心からうなづくのである。

感銘を与へるのである。

此の句は其の幾匹かの春蟬の声がうまく重なつて、盛んな共鳴や唸りのやうな音響効果を現したところを詠んだものである。概して虫の声といふものは一匹の時もいいが、一匹だけでは其の虫の季節の真中に居る気がしないものである。ところがキリギリスならキリギリス、カンタンならカンタンといふやうに一種の虫の数匹がする齊唱となると、それぞれの種の最盛季の印象が鮮明になつて、心持に何かしら安堵に似たものを感じるやうに私は思つてゐる。此の句の場合の作者の気持も恐らくはさうであらう。「珊瑚」といふ見事な形容を以て、「揃ひたる」と如何にも適切に言ひ切つた表現は、作者がその晴れ渡つた初夏の日に春蟬の奏でる玻璃樂器の合奏を、樹脂の香のする松林の丘を、どんなに安らかな又健やかなものとして受とつたかを充分に想像させる。その上此の句からは、此の場合の作者自身の精神と肉体との好調子さへ感じ取ら

珊瑚さんさんは数顆の玉の相触れて鳴る音の形容。
珊瑚と春蟬の声揃ひたる

私としては今此の句を読みながら、遠く低平な下総丘陵一帯に茂る五月の松林を思ひ、山躡躡燃える頃の狭山ヶ丘や野火止あたりの武蔵野を思ひ、かつての行楽と詩の旅のかずかずを思ひ、そして此の高原にやがて訪れる薄暑の季節と野薔薇の候とを待ち望むのである。

うちたてば利根の風あり田草取

利根川べりの平遠な関東平野。見わたすかぎりの水田と、遠く近く島のやうに散在する農家の聚落。その水田に稻は茂り、三日見ぬまに綴れのやうな田草がはびこる。一番草、二番草、三番草。農家はどこも此の辛い田草取の仕事に追はれてゐる。夏の真昼の太陽は頭から焼くやうに照りつける。水は煮える。蛭が吸ひ着く。ブヨが刺す。稻の葉先が目鼻を突く。なまぬるい田の軟泥に足を踏みこんで、身を折りかゞめながら水面を一步づつ這ふやうに進む此の労働に、腰は曲つたまゝ、固く粘つたやうに痛み、しどの汗に濡れた顔は熱く真赤に充血して来る。よそ目には画とも見え歌にもならう此の熱炎の日の田草取の勞苦は、たゞ農家の者ののみが知つてゐるのだ。其の農夫の一人が今やをら立ち上がり腰を伸ばす。すると其處には、一望の田の面には、光と影との縞を走らせて夏野の風が吹き渡つてゐる。風は彼を吹き、彼を越える。青々と涼しい風、利根の風、生れ故郷の田の面の風だ……

此の句からは、作者が農夫を見てゐる場合

と、作者が自分を農夫の立場に置いた場合との、二様の場合が考へられる。其のいづれでも良ささうではあるが、然し私にはやはり後の場合として見る方が好ましい。ちやうど同じ作者の春の行事と温愛との秀句「野を焼いて帰れば燈下母やさし」のやうに。自分を他人の立場に置くといふ此の作句の角度は、今では簡単に古臭いといふ理由から排斥されるやうであるが、私はそれを惜しいと思ふ。今日の俳句の作家達はおのれ自身の主觀や過重視した身辺些事を述べるに急のあまり、その理由づけとして最早や他人の血と化し肉と化する一つの道を捨て去つたのであらうか。しかし俳句といふ文学が一方の生命としてゐる「存在のあはれ」は、しばしば最もすぐれたものとして此の角度から生れるのである。「出替りや幼ごころに物あはれ」の嵐雪の句も、此の系列に属する過去の傑作の一つと言へるであらう。外国の他の例として挙げるには余り比重の大きすぎる嫌はあるが、リルケは「石像の歌」、「自殺者の歌」、「侏儒の歌」、其他いくつかの「歌」を書いて、おのれの血肉を他人の形骸に惜しみなく与へながら、その造型から真に空前の美を成してゐる。

改めて言ふが、私は「うちたてば」といふ此の句の初五に、日本語の醸もす無限の滋味を味はふ者である。

どかと解く夏帶に句を書けとこそ

女が夏帶を解いて、これへ句を書いて下さいと言つた、といふのである。艶にして俠、

厚みと重さと大きいとを持つた堂々たる句である。

句を書くことを所望された当人はまづ作者自身であらう。他人では女の気紛れや我儘を許す「書けとこそ」の情愛が出ない。女は妓か料亭の女将のやうな職業の者と見るのが一番自然だが、事によると今は堅気になつてゐる女か、或は閨秀芸術家のやうな者であるかも知れない。然しいづれにしても自由な身分で、その俳人との間柄は、たとへ淡として水の如き交はりであるにしても、とにかく相手の気心を知りぬいた、充分親しい仲でなくてはならない。男から見える所で帶を解くからである。もしも畳んであつたり未だ仕附糸の掛かつてゐる帶であつたら「解く」とは言はないであらう。艶と俠と情愛との雰囲気は、すべて是等の要素から醸もされてゐるのである。

それにしても「どかと解く」の初五はいかにも見事だ。それが薄つペラな一重帯や名古屋帶のやうな物でなく、紹か、羽二重か、其の塩瀬か、ともかくも厚みと重さとのある新らしい晴の夏帶である事が、此の「どか」の擬音で実に巧みに暗示されてゐる。そして解かれた帯の純白か薄いろの豪華なイメージさへも目に見えるやうである。

「書けとこそ」の文語の語勢も亦此の場合の男の氣持とシチュエイションとをよく現してゐる。其処には女の突然の難題へのいさゝかの驚きと、「我儘な事を言ふ奴だ」と思ひながらの許容の氣持とが含まれてゐる。これが若

しも近來よく見るやうな只の「書けといふ」であつたら、これだけの劇的効果は得られないに違ひない。

☆

なほ以上七句のほかに、私は下記数句の鑑賞を予定してゐたが、急に所用で旅行をしなくてはならなくなつたので之で打ち切ることにした。それにしても虚子さんには、在り来たりの言葉はあるが、やはり「妄評多謝」を言はなくてはなるまい。

薰風の渚伝ひや舟に用

夕立や麁にあつまりし魚浅し

我を指す人の扇にくみけり

炎天の空美しや高野山

下駄傘の新しければ雨涼し

金亀子擲つ闇の深さかな

話し来る一つ日傘に出つ入りつ

子供地をしかと指しをり蚯蚓這ひ

石一つ震ひ沈みゆく清水かな

徽の花咲きゆらぎをりあやしやな

生涯の今的心や金魚見る

蓬々と汝が著たる袷かな

(「俳句」昭和二十七年七月号)

磐 梯

戦争時代の秋桜子さんを語り、其頃の作品を集めた句集「磐梯」の中から数句の鑑賞を書くやうにといふ編集者の註文だが、正直のところ、私はどんな時代の彼についても殆んどと言つていい位知るところが無い。只たまたま目にする彼の句に好きなものが多く、さういふ句に自分の詩境に通じるものを感じられ、そして其人が当代有数の俳人であつて、又医を本業とし、別に或る時期以来野鳥に特別の愛を持ちはじめて、好んで彼等を作句の題材にしてゐるといふ、僅にそんな事位が水原秋桜子といふ人に關しての私の智識である。お会ひして話をしたのだつて戦争時代に一度か三度。それも偶然の機会の事で、心の交流があつたといふ程の歓会には至らなかつた。

こんな事では「人を語る」なんぞは思ひもよらず、又作品の研究にしたところで充分な事の出来やう筈はない。肝腎の「人」のはうは他のポテンシャルな適任者に任せることにして、私としては句集「磐梯」の中から目につきにかなつた幾つかを挙げて鑑賞するにどめて置きたい。それにしても単行本を持つてゐないので、テキストには角川文庫版石田波郷氏編の「水原秋桜子句集」を使用する事にする。

句集の名は「磐梯」でも、火山磐梯への紀行から得られた句は、ここには一句も見当ら

ない。前にも述べたとおり単行本が手もとに無いので責任のある事は言へないが、此の選集によれば磐梯の句は第五句集「蘆刈」第六句集「古鏡」の方にこそ集められてゐる。然し題の事は問題にしまい。漸く困難の度を加へ、日ましに荒寥たるものとなつて行つた戦時下の生活の中で、これらの歌は寧ろきのふまで引続いた輝かしい漸増音の残響であつたと言へるであらう。事実此集に次ぐ「重陽」や「梅下抄」の出る日まで、其の間痛心と流転との満四年が此の俳壇の麒麟児、此の恵まれた才能の人をも容赦なく試みたのであつた。近隣の少女との惜別「柿あかき野に生ひ立てよまた会はむ」や「服しろき面影のこれ鳳仙花」のほのぼのたる哀調から、失つた令息の面輪を車中の一青年に見出した「その眉に櫻紅葉すぎ松が過ぐ」の悲調にいたるまで。

田の池に春の夕焼ぞうつりたる

解釈としては句をそのまま、たとへば関東地方平坦部の、田に囲まれた池の水面に春の夕焼が映つてゐるといふのである。人のよく見る景色であり、眺め入つて暫した、ずむのを惜まぬ景色である。たまゆらの美であつて、しかも永遠への予感に満ちた此のやうな風光を叙するには、文章もあれば詩もあり、短歌もあれば句もあるであらう。しかし句としてこれが私に特にすぐれて見えるのは、十七音といふ極度に限られた詩型の中で、此のやうな平遠な風光の美的本質をしつかと把握して

るる点にある。一見何の奇もない叙法と見えながら、其の叙法の深く編まれた自然さの故に、言ふに言はれぬ天の莊麗と地の廣袤とを想ひ見る自由を読者に与へた彼の作句の技術にある。イマージュの断片いくつかをグロテスクに熔接して、独善と深刻とを強制する似面非ピカソ的技法とは凡そ選を異にした点にある。

「葛飾や桃の籬も水田べり」「畦塗が草加の町をかこみける」の昔から、秋桜子さんには田圃^ばを題材とした秀句が多い。そして其の田圃^ばはすべて平野地方の広々とした田圃である。「養魚池は冬田の畦に垣を結ぶ」は或る雑誌へ出た近作である。そして今田中の池にうつる春の夕焼。思ふに自然と人生との甘美に調和した暢びやかな田園風景への彼の今に変らぬ特別な愛は、連翹の花に里びと垣を結はぬといふあの葛飾の真間のほとりから、遠く其の水を引いてゐるのではないか。

明けぬれど人まだ行かず鉄線花

「鉄線花」は字のとおり「てせんくわ」と読む。往々これをカザグルマと混同してゐる人があるが、同じウマノアシガタ科仙人草属^{クレマチス}でも両種は別物である。テツセンは支那から渡來したと言はれる園芸植物で攀縁性の落葉藤本、対生した羽状複葉の長い葉柄で他物に絡みつき、其の葉腋から花梗を伸ばして、六枚の花弁のやうに見える美しい萼片を直径一寸五分から二寸程の星形に開く。萼片は肉が厚く純白で稍反捲し、各片中央の脈に沿つて

紫の筋が入つてゐる。そして花の真中には暗紫色を呈した雄蕊が簇出してゐる。花季は五月下旬から六月上旬。農家の高い庭木や生垣の一部に絡み茂つて白い大きな星章のやうな花を浮き出させたところは、初夏の山村での如何にも清楚な印象的な眺めである。

此の句がどういふ場所で得られたものかは知らないが、やはり何処かの山村か山近い村里での所見であらう。初夏の短かい夜はすでに明けたが、路行く人の姿はまだ見えない。しつとりと露に濡れた其のすがすがしい村道に朝早い心で立つと、ふと一軒の農家の生垣に点々と鮮やかな鉄線の花が今を盛りと咲いてゐる。その大きな星のやうな花の白さに山ぎはの朝の空がいよいよ青く陶器のやうな其のつめたい静かさに心が遠く歌をおもふ……と言ふやうな句境である。

余談に亘るが、或る書店がその編集部編纂で出した俳諧歳時記に「山茱萸の花」といふ季題が載つてゐる。勿論サンシユユノハナと読むべきで、早春の季題としてふきはしい花木である。ところが其の例句といふのが「山ぐみの花や山道に迷ひしか」である。これでは編纂者が山茱萸をヤマグミと讀んでゐるといふ事になる。しかもヤマグミなどといふ植物はどこにも無い。ハイキングか何かで春山の道に迷つたのなら、其処にありさうな黄いろい花はさしづめダンカンカウバイかアブラチャンのやうな類のものであらう。だから此の場合は作者編纂者共に間違へてゐるのである。

秋桜子さんには「咲きける二極ならむ姐黄^{みつまた}」

なり」といふ東京都下秋川あたりの佳句があるが、さすがに科学者として此の三極といひ、あの鉄線花といひ、正しい觀察と深い感入とをもつて実にみごとである。

梅雨の夜のひと夜風吹き星こぼれ

やむかと見れば又降り出して、来る日も来る日も漠々とした雨雲の低迷する陰湿な蒸し暑い梅雨の季節。こんな時がいつまで続くのかとくさくさしてゐる或夜のこと、突然西風が吹き出して暗く重たい樹々がそよぎ、雲が切れ、その切れまでの空の目もくらむやうな深渊から懐かしい星の光が二つ三つ濡れたやうにきらめいてゐる……

ぱらぱらと露の玉の降りかかるやうな十七音の音の調べ。その抽象的の塵もとめぬ清明と一派漂ふ悲涼の氣。複雑な現前の事相から常に絢爛の質あるものを引き出してこれを純化しようとする秋桜子俳句の好箇の例がこゝにある。「梅雨の夜の」から「ひと夜」へと半ば重なつて、「風吹き星こぼれ」へと運ばれる格調と音感との美しさを何と言はう。それは日本語の眞の味はひを發音によつて味識する事の出来る者にして初めてわかる深甚の美味である。

讃嘆の心の遠い空に「月はやし梢は雨を持ちながら」や「秋もはやばらつく雨に月の形」の芭蕉の句を思ひ浮べてなつかしみながら、此處に此の現代の秀句あるのを喜ぶのである。

潮さしてみなとなりけり鰯雲

鰯雲は秋の季題に入つてゐるが、勿論他の季節にも出現する。多くは斑状に並列した巻積雲（雲高七千米乃至八千米）を指してかう呼んでゐるが、それよりも低いところへ出る高積雲の縁辺が小さいまだらになつて抜がつれるのを同じ名で呼んでゐる場合もある。此の巻積雲は大気の不連續面に出来る雲で、主として低気圧の前面や側面或は後面に現れるし、又海上の天氣悪変の直前にはよく魚の大群の活躍が見られるから、此の雲が出現すると鰯の大漁があると言はれてゐるのもまんざら根拠のない俗説として一蹴してしまふ事も出来ない。しかし雲の形としては過渡的で不安定なものなので、さういつまでも同じ雲形を保ち続けてゐるといふ事はなく、ついさつきまで空の半ばを飾つてゐたかと思ふと今はもう拭ひ去つたやうに消えてしまつてゐたり、一片一片が癒着して幕状になつたり、もつと大きな団塊状や波浪状に変化したりしてゐる。そしてそれだけ、出現したばかりの時は新鮮で美しく、玉のやうに澄み渡つた秋の青空を地にして極めて印象的雲景を展開する。

秋桜子さんの此の句は、さういふふうに無常なるが故にいよいよ美しい巻積雲の現れた空の下のさゝやかな漁港に、秋の潮の満ちて來た時の寂しい美觀と澄んだ旅愁とをいみじくも歌つたもののやうに思はれる。白々と枯れ乾いた貧しい漁村の、船着きとも言へぬ遠浅の入江に沖からの潮がさして來た。さして

来てみればこれでもなほ一つの港ではあつた。をりから此の浜辺の空の一方には眞白な鱗を並べたやうな雲が出てゐる。天と地とが眞合積雲（雲高七千米乃至八千米）を指してかう呼んでゐるが、それよりも低いところへ出る高積雲の縁辺が小さいまだらになつて抜がつれるのを同じ名で呼んでゐる場合もある。此の雲は大気の不連續面に出来る雲で、主として低気圧の前面や側面或は後面に現れるし、又海上の天氣悪変の直前にはよく魚の大群の活躍が見られるから、此の雲が出現すると鰯の大漁があると言はれてゐるのもまんざら根拠のない俗説として一蹴してしまふ事も出来ない。しかし雲の形としては過渡的で不安定なものなので、さういつまでも同じ雲形を保ち続けてゐるといふ事はなく、ついさつきまで空の半ばを飾つてゐたかと思ふと今はもう拭ひ去つたやうに消えてしまつてゐたり、一片一片が癒着して幕状になつたり、もつと大きな団塊状や波浪状に変化したりしてゐる。そしてそれだけ、出現したばかりの時は新鮮で美しく、玉のやうに澄み渡つた秋の青空を地にして極めて印象的雲景を展開する。

秋桜子さんの此の句は、さういふふうに無常なるが故にいよいよ美しい巻積雲の現れた空の下のさゝやかな漁港に、秋の潮の満ちて來た時の寂しい美觀と澄んだ旅愁とをいみじくも歌つたもののやうに思はれる。白々と枯れ乾いた貧しい漁村の、船着きとも言へぬ遠浅の入江に沖からの潮がさして來た。さして

水る畦ゆらぐと見るや鶴居り

秋桜子さんにあつて一つの特異な領域をしてゐる野鳥の句は、すでに遠く「新樹」の中にも散見するが、其の数は集を追つて増し、此の「磐梯」に至つて最も多くを示してゐるやうである。

句の意味は、或時、冬の田圃をひかへた道に立つてみると、其の田圃の水つた畦の一箇所で何か動いた物のあるやうな気がした。そこで改めて眼を凝らして見ると、それは一羽の鶴だつたといふのである。字義どほりには「畦そのものが揺らいだやうな気がした」ともれるが、私は一応自分の解釈の方を探り

翡翠の淵あり瀬々は秋の風

翡翠の淵とは、野鳥カハセミが其処に棲み、或は其処へ水中の小魚を求めて頻繁に訪れて来る淵といふ意味である。別にさういふ個有名詞ではない。又若しもさうだつたら、句としては詰まらない筈である。

たい。然し考へてみれば、其のいづれでもないので、吾々がたゞ機械的に目の網膜に田圃の風景を映してみるとすれば、焦点外れの視野の中で「ゆらいだ」物の正体はまだ何だか分らないのである。まして鶴の朽葉色と銀色の羽毛は、冬田の畦の霜げた土の色に對して保護色の関係にある。それを次の瞬間に凝視して、其処に正しく一羽の鶴を見出した満足の気持。それが作者をして此の句を成さしめたのである。野鳥が好きで、機会あれば、その棲地での生態観察を怠らない人にしてひとり味はふ事の出来る野生の美であり、此の俳人にして初めて的確に生かす事の出来た新句境である。

但し、此の句にすぐ続いて「水る田を移りて鶴二羽となりぬ」があるが、前句のおかげで今まで一羽だつた鳥が、いつのまにか二羽になつたといふ事がわかりはするものの、此の一句だけでは数が殖えた為に二羽になつたのか、減つたので二羽になつたか曖昧で、独立した句としては通じにくい憾みがある。

これが連作かどうかは知らないが、一般に連作といふものの陥る弊がかういふ處にあるのではないかと思ふ。

その渓畔に、温泉場の多い群馬県湯檜曾の谷のとある淵。作者は旅館のヴエランダ橋の上かに立つて其の淵を見おろしてゐる。深く湛へた其の淵の水に近い一本の枝には、さつきから一羽の小さいカハセミがとまつてゐる。カハセミといふ鳥は生きの命も精悍に、

背面を目もさめるやうな空青色に彩られ、鋭い長い嘴に短い尾羽、白い喉、金茶の腹も美しく、或はじつと静止して水中の餌物をうかがひ、或はしうきを上げて水に飛びこみ、又金属的な小さい叫びを残しながら岸に沿つて矢のやうに飛ぶ。作者はそれをさつきから見てゐたのである。をりから季節は葛の花咲く晩夏初秋。すでに上野も越後に近い此の山あひの温泉場では、青い縊気が身にしみて、やともすれば寒い程である。そして気がつけば、此処で渾をつくつてゐる湯檜曾の川はむかうでは幾つもの瀬になつて、川底の石に激する水の流れが空の反射にその冷たい漣をきらきらきら光らせてゐる。もう秋だ。山々に紅葉の消息こそはまだ無いが、谷川の瀬々を吹きわたる風はまさしく秋だ……。

翡翠の淵といひ、瀬々の秋風といひ、一句の姿、選ばれた言葉とその内容。すべて此の人の永い修練の跡を語るものと言はなくてはならない。

黄鸝や沢辺に多き薊の座

大瑠璃鳥をきくや沢蟹のよぎる徑

むさゝびの巣ごもるこゑのこの遠さ

小鳥と小獸とを題材とした是等の句も、句集「磐梯」中野生諷詠の逸品であり、其の鑑賞を書くことも、殊に私にとつては一つの鎖

夏の楽しみではあるが、すでに規定の紙数にも達してしまつたからこれで割愛したい。

(俳句) 昭和二十七年九月号)

水原秋桜子『薩摩山菊』

秋桜子さんの隨筆は私も折にふれて読んで来たが、こうして一冊に纏まつてみると、曾て淡々として奇もなかつたように見えた一篇がそれぞれ動機や意味の脈絡を得て、この当代の一大家の生活雰囲気、好尚、人となりなどが、一つのほとんど完全なイメージとなつて浮き出して来る。そして内容の二十篇がすべて多かれ少なかれ直接俳句に関係しているのでこの道を志している人々にはどんなに勉強になり教えられるところが多いか知れないだろうと思う。その清潔な文章は暢達で、樂々と書いた物のように見えながら、此処ぞ

という目の据えどころは厳しく持して放たないので、すべての芸術の場合と同じように、俳句の契機もまた結局は人間の契機に帰するものだという事がよくわかる。「薩摩山菊」の題名も好ましいし、その清楚な花を鬱蒼と盛りあげた上村巖氏の表紙画も美しい。内容といい本そのものといい、すべてが秋桜子さんの此の世の姿を思わせる此の隨筆集を、私は俳句を好きな一般の読者にもすゝめたい。

(「日本讀書新聞」一枚書評欄
昭和二十八年八月二十四日)

祝詞に代えて

昭和三十九年五月

秋桜子さんのこのたびの芸術院賞受賞をおたげられて不本意ながら志が果たせない。それで思案の末、昨昭和三八年一月号から今年の六月号までの『馬酔木』に発表された二百六十九句のうち、敬服してノートに書きとめて置いたのが十三句ほどがあるので、それを挙げてお祝いの微衷のしとしたい。俳句の上では元より初心者。ただ、一人の詩人が、どんな句をどんなふうに受けとつて感心したかを見て頂ければそれで充分なのである。

浦安や春の遠さの白魚鍋

行徳でもなく、桑名でもなく、音感も字づらも共に安らかに懐かしい下総の浦安なのである。そして春はまだ遠いその浦安での白魚鍋。春も遠ければ潮浅い海の眺めも果て遠く、芭蕉の記憶もまた遙遠である。「春の遠さの中七、沸々たがるちり鍋の佳肴と相呼んで、一句の味わいまことに言いつくせぬものがある。そして私には、葛飾の桃の籠の昔さえ思

霞む海紅梅薬を撥ねにけり

秋桜子さんが好んで詠む熱海・伊豆山の句の一つである。そして彼が伊豆のあたりの海岸を好きだという事は、私には特に藝術的にも象徴的なことのように思われる。かつて紅梅の上を波の流れるのを詠んだ秋桜子さんは、歌人実朝のよく踏みこみ得なかつた一層雄強な境地へ踏み入つたのである。うらうらと霞む伊豆の海を背景に、粲々と雄薬の束を立てた紅梅もそうである。紅梅に対する彼の殊愛もさることながら、これが白い梅だつたらやはり印象はぼやけてしまつたであろう。

春暁を降りいですぐに大雨なり

「春暁」であり「大雨」なのである。まずこの二語の音感と含蓄と広がりとを味わわなければならぬ。しかも息もつがせず「すぐ」に「大雨」なのである。春の夜明けを低気圧が襲来したとか前線が通つたとか、そんな気象談義をやつている暇もなく、そのまま、いきなり、天地をこめる槍ぶすまのような大降り。

「すぐに」の俗語が力源となり、濁音の「豪雨」でない清音の「大雨」がこの句の生命となつてゐる。うつかり真似たらおかしな物になるだろう。一事不再発の「すぐに」であり「大雨」であることを銘記したい。

林檎咲き荒瀬北指す川ばかり

白馬岳紀行十一句中のすぐれた一句である。
仁科三湖の青木湖から北流して、途中松川、

中谷川、大所川などを併せた姫川は、深い峡谷をうがつたり慰め薄い礫原の風景を展開したりしながら糸魚川の西で日本海にそそぐ。

「北指す川ばかり」のその川がこれらの諸川であり、「荒瀬」はその峡谷や礫原の水の姿である。しかしこの句のいのちは三、四と切れた「荒瀬北指す」の中七の切迫した語調にある。すなわち音樂で言うフーガのストレッタ、主題の入りと応答の入りとの時間的間隔を小さくして、そこにリズム的緊張感を生む手法である。そして「川ばかり」の座五へ流れこむ中間部のこのストレッタが、寥廓たる日本海の空の下を北流する川の荒涼景を直叙し、おりから林檎の花をさえ、ほかのとは違つた寂しく白く凜々しいものに見せてゐるのである。

雪渓の雲くづれ落つ黒部谿

これも白馬岳紀行中の一句だが、句が言おうとしている実景の暗く深く厚みのある美は、或いは黒部渓谷を見た人でないと切実にはわからないかも知れない。その厚みが「雲くづれ落つ」にあり、しかも「雲」と「くづれ落つ」と「黒部谿」の三つの「く」の音のならかな重なり合いが、そのほのぐらい効果を強めていると見るのは私の思いすこしである。しかし言うまでもない事だが、俳句は声に出して読んでみないと本当の味はわからないのである。これは詩でも同様だが、わずか十七字という叙情的な短詩形にあつては尚更のことである。

雪橋や獸行きけむ痕蒼き

これも白馬行の一局。雪橋はスノウ・ブリッジの日本語訳。「せつきょう」と読むのである。そしてここでもまた「獸」の「け」と「行きけむ」の「け」とが金属的に響き合い、それが高山の空の色を吸つた獸の足跡のくぼみの蒼さと怪しく美しく照應しているように思われる。「ける」と共に秋桜子さん愛用の「けむ」という雅文調がここでも雄勁にしかも優美に働いて、その獸を氣品のあるカモシカかオコジョのように想像させる。勿論そんな處にはいもしないだろうが、同じ獸でも猪や狸のような仲間は思わせない。

学園や郭公榆をくゞり飛ぶ

学園は札幌の北海道大学であり、榆は校庭にあつて余りにも有名なエルムの並木である。そして北方の夏を鬱蒼と茂つたそのエルムの大樹の列の下を一羽の郭公がくぐつて飛ぶ。建物も植物も由緒深く、歴史に重い北大の構内。郭公さえもそこいらの高原でざらに見る郭公ではなく、北海道のこの最古の学園の鳥なのである。何でもないよう見える「くゞり飛ぶ」に無量の重みがあり、「学園や」に一挙にして尽くされた古く遠い歴史の広がりがある。句の中で郭公の鳴かないのがなおさらいい。

薰風の来て海豹に波まろぶ

前句や後の二句と同じように北海道紀行

「砂丘と花園」の中の作である。海豹必ずしも美しい動物ではないが、「薰風の来て」や「波まろぶ」の措辞のために濡れ濡れた海獸の姿態、まことに愛讀すべきものとなつてゐる。波が小さく寄せるにつけても丸い鈍重な彼の砂上の寝姿がよみがえる。波もまろべば海豹もまろぶ。そこへ生氣をそそぐのが能取岬の夏の縹渺として匂やかな海風なのである。

泉湧きゆがみて戻る鱈の列

「虹別孵化場にて」という前書がついてゐる。

孵化場や養魚池で見る稚い魚は、いつ誰がどうしてリーダーになるのか知らないが、先頭をゆく魚に従つて何十匹というのが行儀よく列を作つて泳いでいる。この可愛い鱈たちもそれである。ところが行く手の水の中に水が湧いて、水勢や水圧が変り、無数の小さい気泡がはじけながら林立している。そこで突如としてリーダーが方向を転換する。すると今まで整然とおとなしく泳いできた稚魚の列の先頭にちよつとした狼狽と混乱が起ころ。そこで連續的な行進隊形に僅かながらひずみが生ずる。言つてしまえばそれだけの事だが、私の感心するのはこの「ゆがみて戻る」である。ちよつと動搖しながらも柔軟に且つ黙々と転向するその幼い魚たちの動きを、たつた七字でさながらに言い現わした平常語の決定的な使い方である。

澄む水や蟹ひそむ石起しても

「水澄む」は人も知る秋の季語である。そし

て「石起しても」だから、ここでは「澄む水や」でなくてはならない。しかし遠い北方の旅にあつて、谷だか海辺だかで試みに石を起こしてみると、その下に一匹小さい蟹がひそんでいて、そこに溜まつてゐる水もまた澄んで冷めたかつたというのはいかにも美しく秋らしい。まことにすぐれた一句であり、

「ダス・ティイジ物」の句である。そして秋桜子さんに物に即した秀句の多いのを、私は彼の俳人生命の長続きする兆候だと思っている。思いをひそめて見れば見るほど物はわれわれにそれ自身を語り、しかもそれ自体けつして尽きることがないからである。

冬の梅はげしき夜雨に匂ふなり

ここでもまた「雄勁」の形容がぴつたりし、作者の氣象の強い一面が想われる。まつすぐに言い放たれた十七字は直下のもので、その間なんの細工も思わせぶりもない。梅は冬の梅、雨は夜半の雨でしかもはげしい。私には窓から闇夜の庭をのぞいている人の姿が想われる。雨は空の微光か窓からの明りを吸つて白い滝のように見える。花咲く梅はしたたかな雨のつぶてに打たれている。「はげしき」の一語にその雨の量感と質感とがある。映写幕に現された瞬時の情景ではあるが、机上の想像などではとうてい出来ない触目の純粹感動の一句である。熱海の紅梅の「撥ねにけり」といゝこの夜の梅の「匂ふなり」といゝ、二つの終止形が共に雄々しく梅らしい。

岩は皆渦潮しろし十三夜

「足摺岬に句碑を建つるとて」という前書がある。そう言られてみるとこの渦潮は、言葉こそ同じだが風景の性格が阿波鳴門のそれとは違つて、もつと平遠で、もつと寂しく、もつと白々と荒れている。果てしない沖に臨んだ岩は一望の岩礁であり、その岩礁に寄せてひろがる水はすべて干渉し合つて渦をなし、おりから十三夜の月光を浴びて白い。これ

は前出の蟹や梅の句などと違つて大景の句である。大国土佐の南端、それも室戸岬などとは趣を異にした岬端風景を目に描かない、この実景は生きて来にくい。これから観光客がどう思つて読むか知らないが、この句の隠れた主眼は太平洋の夜のひろがりであり、黒潮に煙つた未知の水平線への郷愁なのである。壮大なロマンティシズム。渦潮しろしがそのかなめであると言おうか。

木瓜の荷を解く紅白や植木市

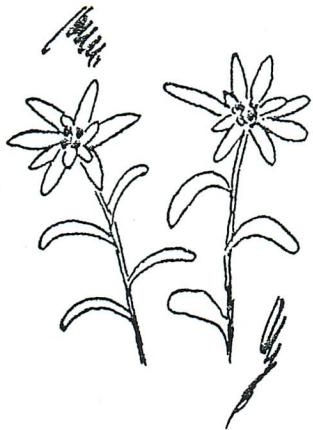
植木市が立つて、集まつた植木屋の一人が、繩でしばつて運んできた木瓜の株をほどいているところである。しかし一体「荷を解く」という言葉の語感が、中年前の読者にどれほどに、またどのようににわかられているだろうかが実は私に疑問なのである。簡潔で微妙に具象的この言葉などは、永く保存したい日本語の一つだと思うが、「荷」は普通「荷物」と言うのとは少し違ひ、「解く」も場合によつてはまた幾分ニューアンスが違つ。しかし

とにかく「荷を解く」。そしてその荷という
のが花の咲いている木瓜なのである。その花
や蕾を落とさないように気をつけて、張つて
いる枝をなだめるように撓め集めて、要所要
所を藁縄でしばった売り物の木瓜。それが
「荷」であり、その荷を今植木市でほどいて
いるのである。そしてパラリとほどけたその
木瓜は赤と白。堅く根廻しをして縄でくくつ
た根は土団子。枝の間には売り値を書いた荷
札のような紙切れがもう細い針金でつけてあ
る。売り物ながら植物への愛と細心の注意。
そう乱暴に縄をパチパチ切り放したり、むげ
に枝を押しひろげたりしたのでは植木屋とも
言えないだろう。抱きかかえるように扱つて
道の片隅に見えよく飾る。

そしてその植木屋のこれだけの手数、これ
だけの心くばりが、実に「木瓜の荷を解く」
の七字で活写されているのである。

（初出・『馬酔木』昭和三十九年七月。）

『私の衆讃歌』より



行 人 俳 句 • 連 句

山村新年

よみがえった句

尾崎喜八詩文集7より

諏訪地方、晩の挨拶に「お疲れでございます」と言ふ

お疲れといふたそがれの頬かむり

この沢にきのふは雉子を年木樵

灌木くろづばらは棘ありて葉落つれば黒く円
き美いちじるし

今朝の冬宋磁に活けん黒つばら

高原療養所裏の路傍に苔蒸せる道標ころげ
をり

凍雲や「右諏訪左木之間みち」

諏訪湖畔

餅花に湖の風あり神宮寺
厳寒の背革も「大氣物理学」

紅鶴やよもぎ伏せたる雪二尺
長女栄子を訪るるとて立沢道

頬白のつぎつぎと立ち冬木原
わが妻も藁沓遠き礼者かな

野沢菜をきざむ手紅し夕みぞれ

富士見駅
風花や汽車降りてくる女学生
風花や上り待つ間の下り汽車
紫の深雪の夕と眼をとぢぬ

春哀れ遠オ浮びをる槍穂高
わが畠よりの眺め

広河原とて散岩に夏わらび

鳴虫かんだん到るところ

邯鄲の細みふくらみ一節に

とんばとんば夕日の村となりしより

いわけなき苔弟切も紅葉なる

釜無谷に臨める山の中腹に俚称大ガヤといへる戦災の東京人三家族の開墾地あり

大萱の開墾訪はむ花すすき

裾野秋わが鎌瘦せて雲白し

粟打つて額髪の塵賤しからず

崩落といふは唐松もみぢかな

降りたりて容りぬ春深雪

ひこばえの捩木の赤や雪の果

冬果てぬほの白樺にスピカ星

山焼くは泉野村かうつけぶり

野辺山の野を焼く煙日もすがら

夕づづに桜ぞくらき其処も里

畦塗のいづれが姉ぞ帶の色

蘭掘るや峠の雨雲さがり来る

釜無川七里岩

畦塗の顔振り上げしみめかたち

路に画架春泥の色重ねをり

なまなまと春泥描きぬ盛り上げて

キヤベツ時くとて
物種のあはれ一勺といふ桝目

送別一句

春愁の坂をくだりて転任す

車窓春若き赴任の眸めもあらむ

花葱や安曇を乾く沖積土
松本郊外島内

邯鄲やしらじら風の日もすがら

啄木鳥鳴くや夕日が中の水木の芽

行人句抄

甲斐信濃谷の一重や春の鶴

春蘭を掘るや雨雲さがり来る

炭櫻につけ来しあげび芽の未だ

雪沓を仕舞ふと干せば蝶の附く

轟や雨意しきりなる谷の村

思ふかなまだきの奥の花うばら

花杏千曲の風がなみなみと

いつのまに大きな春の雲となりし

友人長男高校卒業

ブロックフレーテの練習

笛孔の漆の朱や草青む

種袋絵が美しと妻は捨てず

をりをりの汽笛や霧の向山

唐松の黄葉崩れんばかりなる

白樺の小割作るや日雀来る

一位なほ紅二三點冬に入る

朝々の霧晴れて行くあをじ哉

音のして霰うれしき田舎かな

冬木立赤げらの赤奢りとも

雪晴れや刻めるごとき野鼠の道

初空や雲に散りこむひわあたり

餅花に雪こそ匂へ駒ヶ嶽

遠きもの春てふ文字をいろいろに

別れとは額髪の雪払ふこと

月今宵木曾をいなゝく駒の夢

信濃住み

蜂取りの花火も鬻ぎ伊那の秋

俳句誌掲載

*印は「よみがえった句」「行人句抄」と重複

勿来・磯原吟行

阿武隈は山みなおなじ春の雲

みちのくや春ひねもすの松に波
(「かびれ」昭和十八年六月)

能登紀行

能登島を取舵にして夏の月

夕照りの珠洲一郡よ沖なます

黄蜀葵能登は住みよき家居かな

朝涼を羽昨の町のいくまがり

奥能登の漆のさびや夜の秋
(「かびれ」昭和二十一年九月)

時雨るや開墾小屋も切株も

(「かびれ」昭和二十一年一月)

かびれ俳句 大竹孤悠選

落葉籠けらの拔羽も交りたる

かびれ俳句 大竹孤悠選

溝蕎麦にふと懐かしむ夕餉かな

秋閑か松に交啄鳥の小半日

観測の野帳に挟め草もみぢ

凍雲や右諏訪左木之間みぢ

かびれ俳句 大竹孤悠選

邯鄲やしらじら風の日もすがら
(「かびれ」昭和二十一年十一月)

落葉籠

白樺の小割作るや日雀来る

唐松の黄葉崩れんばかりなる

枯れくて黒と銀との蓬かな

行秋の峠を越えて佐久を見ん

落葉籠けらの拔羽も交りたる

かびれ俳句 大竹孤悠選

溝蕎麦にふと懐かしむ夕餉かな

秋閑か松に交啄鳥の小半日

観測の野帳に挟め草もみぢ

凍雲や右諏訪左木之間みぢ

かびれ俳句 大竹孤悠選

鳥賊買うて野を帰り路や夕霞

お疲れといふかはたれの頬被

冬の花抄

* 風花や上り待つ間の下り汽車

* 野沢菜を刻む手赤し夕みぞれ

ぬかるみを踏み手を伸べて若菜摘み

* 餅花に湖の風あり神宮寺

水仙や去年の安房路の小夜衾

(「かびれ」昭和二十二年四月)

待春抄

掘割やひそかに霜の土なだれ

* 音のして霰うれしき田舎かな

石切りの山休みらし寒霞

冬霞して開拓地伐りしまま

いわけなや悴みつゝも遊びをる

春めけば「憩」の封を切ることも

春もやゝ鯉うねるかに青みどろ
春寒や我が著もならぶ飾窓

雪渓に雨雲なづむ春淋し

* 春哀れ遠浮びをる槍穂高

(「かびれ」昭和二十四年五月)

日暮孤吟

* 夕つづに桜ほ暗き其処も里

牧の柵暮春を朽ちて起伏かな

* 畦塗のいづれが姉ぞ帶の色

春蟬は亭午の松をにじり鳴き

花葱や安曇を乾く冲積土

* 風呂焚きつ碧巖読めば囀れる

* 雉鳴くや清貧妻を研ぎ照らし

花しどみ流離といへど天地かな

* 広河原とて散岩に夏わらび

いつのまに大きな春の雲となりし

* 春霰を刷いて枯芝黄の淡く

物種のあはれ一勺といふ枊目

* 甲斐信濃谷の一重や春の鶴

野辺山の野を焼く煙日もすがら

(「俳句」昭和二十七年六月)

降り足りて容りぬ春深雪
ひこばえの振木の赤や雪の果

* 三月の地衣を育む雨しげし

春冬の思ひのひまを雨ぞ降る

蓼科の遠ホ傾ける雪間かな

冬果てぬほの白樺にスピカ星

春寒き出土の壺に模様ある

種袋絵が美しと妻は捨てず

春霰を刷いて枯芝黄の淡く

いつのまに大きな春の雲となりし

物種のあはれ一勺といふ枊目

* 甲斐信濃谷の一重や春の鶴

野辺山の野を焼く煙日もすがら

* 山焼くは泉野村かうちけぶり

懷旧

肥の香や余花に耘る勿来人

(「かびれ」昭和二十四年八月)

雪の窪紅ましこるて声すなり
高原浅春

連翹に春嶮しけれ遠チ暗く

いとまあれやル一ペが下の花繁^{はこべ}裏

梅紅く鶴の別れ空にあり

尾長群るまだきの辛夷零しつゝ

白木蓮のしるきうしろは書庫ならむ

晴雨計打てば下りつ芽木の窓

書窓遠望一句

春分の入日筈子に今滾^{なま}つ

春や遠チ農鳥岳浮けて甲斐信濃
(俳句) 昭和二十八年五月

拾遺

一九六二年一月四日 実景

立春も夕日となりぬひよつぐみ
春寒や考古の室を観る二人
蓼科のはや春雪と言ふべかり
漂ひて代田のげんげ哀れなる
文書いて出さずやみぬる春の風邪
春めくや巽に上がる真夜の星

風船をあなや放ちつ桐の花
秩父見ゆ春雷すぎし風の色
ことほぎ
春清ら世の幸たらむ男の児生れ
としつきや梅ふたもの花円か
日雀女や春の山伐る音悲し
彼岸寺斑雪の八嶽を木の間かな
濡紙にゑがける如き春の雷
羽重く春のいづこへ天道虫
牛小屋をよぎる初蝶絢爛と
大瑠璃のしばし鳴きやみ崖若葉
路きけば翁はつんば花李
朴の花晴れて暮春の山暗し
郭公よ八岳晴れあやめ咲きてけり
甲斐駒の黑白を前に剪定す
白樺を青葉の森に剥ぐ乙女
花あんず佳節の雨にうつけぶり
花蕎麦に蜜蜂金のつぶてとも
岩魚焼けば皮薰るかな塩は煮え
わがための釜無の鍋皿に反り
落慶の椽すがやかに夏の蝶
ゴム鞠の見えずなりにし赤のまゝ
花咲ける孤独の奥ぞ岳の連ら
明月院本堂落慶の祝い

花南秋川
富士見流寓

瑠璃啼けど人々ダムに倚るばかり
るり鳴くや雨後匂ひ立つ大穂高
日にとざす別荘の数懸巣鳴く
鳥頭切屑のごと散れるかな
鳥頭更級升麻どつと活け
山あひに甲斐の雲見ゆ鳥頭
もずの巣を隠して棠梨の花たはは
表札のこの名に記憶權垣
田打笠緒の紅なるが向ふむき
滴るや一羽の蝶の行き返り
邯鄲やしらじら風の八ヶ岳
野辺山の花野の雨や開墾す
花柘榴ゆゆしき蜂の巣を軒に
藤屋洞
仔の馬のまつげ愛らしかきつばた
浜の傘花やぐ沖を海流れ
秋は海の近きものかな夕なぎさ
鳴きつれて真夜の秋行く鳴千鳥
これやこの妻とライ麦打ちし庭
蜂取りの花火も売りて諷訪の秋
誰が吐きし通草の種ぞ霧の沢
道雲に通草の谷も比處よりぞ
姨捨の駅見えてくる秋の雲
木曾谷に一日懸かれり秋の雲
吾母紅われに悔なき木曾路かな
信州鳥居

とち落葉婆娑たる道のひるの月
雲行くや薄が中の濃りんだう

秋暑し大湯とざせる休電日

富士見高原療養所句誌「白樺」掲載句
前出の句と重複するもの七句省略

連句三卷

梅雨濛々山ばうしかや花の自
梅雨の野に出て新たなる心かな
卯の花やあの畠隅の百舌出入り
先生にふと郷愁の花いばら

春雲の巻

尾崎行人
大竹孤悠
坂本波之
小松崎爽壹

秋暑し大湯とざせる休電日
湖の秋しきりに鳶の水を搏つ
漕ぎ出でて日傘ひろげし湖上かな
松虫草の路の果てなる夕浅間
ふくべ棚小使室にラヂオあり
この原や風露草うつ霧の粒
追分も時雨降りけむ駅濡る、
風船は誰が手放れし秋祭
秋雨となるさへ祭果つるさへ
うどの葉に秋の祭の餅包み
村祭露店に蝶の羽根弱し
松日の祭に来て

カルメル修道院三句

秋の日よ松目なつかし見に行かむ
秋立つやマチス画集に蔵書印
柳散りみ堂洩くれる朝のミサ
山茶花にミラノの僧の顔幼な
入信の志あり格咲き
霜焼けの美しく泣かんばかりなり
残雪がつるぎの如くある林
喜びよ生きて努めて八十路の春
寒明けや土の香暗きもぐら塚
如月や苔をやしなふ霧小雨
啓蟄といへども信濃雪暗く
きさらぎや苔をはぐ、む雨細し
庭実景
一九七三年一月三十一日

風船は誰が手放れし秋祭
秋雨となるさへ祭果つるさへ
うどの葉に秋の祭の餅包み
村祭露店に蝶の羽根弱し
松目の祭に来て

柳散りみ堂洩くれる朝のミサ
山茶花にミラノの僧の顔幼な
入信の志あり格咲き
霜焼けの美しく泣かんばかりなり
残雪がつるぎの如くある林

庭実景

喜びよ生きて努めて八十路の
寒明けや土の香暗きもぐら塚
如月や苔をやしなふ霧小雨
啓蟄といへども信濃雪暗く
きさらぎや苔をはぐ、む雨細し
庭実景

道せばみここから先の村祭
花笠に薄刈り添へ祭かな
祭客背戸に出て見る萩紫苑
東京の子は髪長く村祭
鱗雲ならべて穂屋野祭かな
秋のバス祭の村のをちかたを

阿部隈は山みなおなじ春の雲
頬白鳴いて松の花降る
あた、かにわらんじ湿る頃なれや
月地車で曳く供出の鐘
今宵石山工場灯して
穂屋の芒に風渡るなり
善七がごろりとまろぶ露の中
嫁とする兄へひとりさからふ
唯子や男の帶のへりか心地

地蔵寺の枝垂桜も薄紅葉
鶴鳴くや妻は南の豆畑に
さむしろに豆叩きをり妻小春
物干してふと若く見え落葉髪
豆殻につく野鼠の小さきを
秋麗ら土龍の塚に蜘蛛の糸
秋花鳥

(「白樺」昭26・9月号)

道せばみここから先の村祭
花笠に薄刈り添へ祭かな
祭客背戸に出て見る萩紫苑
東京の子は髪長く村祭
鱗雲ならべて穂屋野祭かな
秋のバス祭の村のをちかたを

晚秋小景

(「白樺」昭25・11月号)

阿部隈は山みなおなじ春の雲
頬白鳴いて松の花降る
あたかにわらんじ湿る頃なれや
地車で曳く供出の鐘
月今宵石山工場灯して
穂屋の芒に風渡るなり
善七がごろりとまろぶ露の中
嫁とする兄へひとりさからふ
帷子や男の帶のしめ心地
水をころがる声うつくしう
撥釣瓶きりくきりと汲みあげて
鎌を立てたる屋根の大きいさ
うき旅の片見月とて戸をひかせ
投げざまに挿すコスマスの色
浦の子が馳けゆく砂の爽かに
鳥が干魚つゝく長閑さ

初花に酔のききすきし臘して
空は鬱金に春暮るゝ町
渋き茶をたまはる補宜のもたいなく
ふところにある玉子二つぶ
立ながら綻縫はす朝まだき
浮寝の鴨をめぐる水の輪
思羽の消えなん夢のあだけなく

青人悠之青人悠青之人悠青之悠人青之悠人

京の小路は昼の淡雪
鉄拳の大きいさ尺に余りける
好きが病のこの冷奴
警報にあやめもわかぬ巻脚紺
頭巾の奥の鶉の目鷹の目
監視哨立てばしきりに秋の声
月も出丸に横笛を吹く
散り散りて錆鮎の瀬となるところ
筏をほぐす人たくましき
小田の道藁おきならべ雨近し
雞あそぶ里の遅き日
花咲かばまた訪はましと契り来て
霞の奥に霞むみちのく
(「かびれ」昭和十八)

日立の巻

人責悠人畫悠人畫悠人畫悠人畫悠人畫

爽氣目に沁む猿のまた、き
お遙かとわりなく蕎麦をもてなされ
同じ苗字のつゞく一村
初花はうすくれなるに頬そめて
吐息と燃えよかぎろひの中
くちづけてはた忘れゆく春の水
流離四年の人もそらさず
金借りる間も夕立の容赦なく
見覚えのある下駄の焼印
盗まれて俄に惜しき品となり
古扇面は雪の緋牡丹
昼閑か飛鳥といへる香炷かん
大和障子の日綾さらさら
黒髪をおろさる、身ぞ悲しけれ
つたなき恋に重き文がら
思ひかね肩おとしたる月夜ざし
衿の襟のさむききぬぎぬ
散りかかる柳に旅のせつかれて
夢すでに飛ぶ越の海山
雲の果て誰が幸住むと言ひつらん
吹けばよく鳴る鳩笛を手に
れきろくを円かに包む花幾里
火の見の影を曳ける遅き日
昭和二十四年十二月
（「かびれ」昭和二十
於

夏霞の巻

霞坂本波之 日里にん山てぬしられらん丹り印くず水中て村れき
十五年四月二十日 悠人青悠人青悠青人悠青人悠青人青悠人青悠

木下闇くゝる流のつめたくて
穂屋野の雲がよぎる廃園
一つ残す李朝の壺にけふの月
おのが焚く火にむせて咳する
講義終へて銀杏の秋をふと仰ぎ
このごろとんと絶えし音信
明眸に明石縮の似合ひける
屈託無さが親の心配
芸一途いまだに捨てぬ舞扇
素明の幅は那須の色草
更くるほどいよいよ月の惜まれて
離愁の沖に潮煙湧く
爽や龍骨けづる鉋屑
御庭番とて畏り居る
山畠の花に耕す伊賀に生き
供揃へして大門を通る仕儀
意見無用と投げし杯
連歌師は優に雅びて在しけり
法帖にきく寧樂の墨の香
本堂の柱瘦せたり啄木鳥の孔
桂の里におそや電線
空蟬の胸かき抱くあはれさよ
益様を呼ぶ子等の声する
やうやくに線香花火も果てたらし
主が好きで蝦蟇の置物
鍋の芋焦げつかせけり寢待月
叱られて立つ背戸のうそ寒
黒潮のふるさと恋ほし勇魚船
石段くねる村の通ひ路

人 人 之 人 之 人 之 人 人 之 人 之 人 之 人 之 人 之 人 之 人 之 人 之 人 之 行

山中に曆日無けん大藁家
炬燵仕舞へばがらんだうなり
老いらくをむしろほのほの暁の花

峯の斑

雪も滴瀝の春

昭和二十四年七月十八日

於信濃富士見高原分水莊

(かびれ)昭和二十四年十月

人之

紺の背広の折目正しく
父としも頼みし人の賀の宴に

客辞して耳立つ虫や庭の閑
武漢の市を又いつか見ん

ら

高橋立路 尾崎行人
吉村博次 石黒叡子 伊藤海彦
昭和二十三年三月十四日、二十三日

人子

穂屋野歌仙

昭和二十四年七月十八日
(一月三日夜、分水莊)

尾崎行人

○三つ物

昭和二十四年二月十九日、分水莊

石黒叡子 尾崎行人

芹摘の巻

高橋立路 尾崎行人
吉村博次 石黒叡子 伊藤海彦
昭和二十四年四月一日

人子

若菜川雪のかたまり流れ来て
紫搖る、榛の花房

尾崎行人

芹摘めば芹も冷たし一の沢
雪消え霞むふるさとの山

人立路

紅絹裏に手の荒かこつ日向縁

尾崎行人

外濠の水にはなやぐ夏の月
ライタアぱちと待つは蜜豆

人立路

ほのぐと舞踏の手帖取上げて
連山ひそと夕映のいろ

尾崎行人

春の人越えて行くなり一人にて
尾燈にじませ遠ざかる汽車

人立路

麦とろを食ふ音の脳か
家毎に出湯ある諏訪の春寒く

尾崎行人

初裏
外濠の水にはなやぐ夏の月
ライタアぱちと待つは蜜豆

人立路

○三つ物
年木割ぬぐひし汗のすぐ凍り
大写しにて見せた横顔

尾崎行人

紫の煙もつる、帶厚く
露路の別に疊るジャズの音

人立路

省線のホームの夜の風寒き

尾崎行人

幾許の思ひ出もあり神戸港
岬離れて船は縦揺れ

人立路

臘梅をひそと活けたる足袋白く
玻璃の大きな病院の窓

尾崎行人

廣東に残せし夢のほろにがく
黄土の岸に柳一刷毛

人立路

○六つ物

尾崎行人

母子連れ嬉々と出て行く茸狩
都ながらも山幸の汁

人立路

鳥一羽輪をかいてゐるお濠端
近江路は豌豆の香も籠にて

尾崎行人

宵はショパンの夜曲うらゝか
花の窓新刊の書に日を暮らし

人立路

芝居出て町は卯月の宵闇を
近江路は豌豆の香も籠にて

阿きら 行人 人ら

聖路加の窓みな灯し夏の月
銀座の裏で店をはじめる

尾崎行人

愛蔵のデュフュイの水絵額に入れ
フレュートの音の冴え残る樂にして

人立路

水羊羹に薄茶一服
笠長靴と駅の人ごみ

尾崎行人

摘草に春の早手の襲ひ来て
名残表

人立路

税金に話題は落ちる昨日今日

浮世

遙か

に桶の

箍掛け

卒業の免状見せに伯父が家へお茶の点前に畏まり居る真蹟の一茶を床に柿若葉

鼠花火の走る四つ辻

団扇もて隠す噂のうそまこと

二人ならんだ劇場の椅子

月の露鉄平石の屋根濡れて

何をか騒ぐ伊那の樺鳥

瀬を過ぎて静になりゆく薦紅葉

丸鋸かへ鑓かけぬる

たのもしく馬力曳込む薪百把

越年蝶を今日見しといふ

大穂高峯の花の夕影に

里は安曇の雲雀鳴きやむ

名残裏

尾崎行人

白崎春茨

高橋立路

俳席行人居、立路居

五月四日、九日、十七日

唄捨の巻

唄捨の駅の高さよ花杏
信越線は芽木の山陰
燕の出でに入る部屋に通されて
暗い電気に旅の画葉書
夜歩きの人まだ絶えぬ町の月
陸稻畠に風のさざなみ
重箱を土産に帰る太鼓かな
粧はずして鄙に稀なる
白壁に書かれし傘の口惜しく

桃里 春茨 人 路 路 人 路 人 行人 立路

月の露鉄平石の屋根濡れて
何をか騒ぐ伊那の樺鳥
二人ならんだ劇場の椅子
月の露鉄平石の屋根濡れて
何をか騒ぐ伊那の樺鳥

尾崎行人 高橋立路
白崎春茨 石黒桃里
俳席行人居、立路居

身につまさる、伊豆の踊子
海荒れを便待つ間の子守唄
月今宵汝を主に酒酌まん
三田稻門と昼の喊声
勢子掛けて幾山越えし櫓明り
ロケイションには遠い三面
落老いて峠田の桜ほころびぬ
家毎に銅ふ瑠璃や鶯
想い病む遊女の部屋の春小袖
氣だて優しく町に炭売る
縁談に仲人話長くして
夜更にひゞく支那蕎麦の笛
貧生に森川町は寒かりし
特選の札燐とかゞやく
甲子園は地元チームの勝ち残り
鳶に豆腐を攫はる、憂き
院坊も余剩住居の梓の内
表札は聞き知らぬ名ぞ月の門
道二叉を迷ふみなしご
星占に人立つ背戸や夜の秋
籌が出る古い虫干
籌は沖に網下ろすらん
夢に見し母国土を今日踏みぬ
おばこおけさや木曾節の春
窓を洩れ来るミサの歌声

身につまさる、伊豆の踊子
海荒れを便待つ間の子守唄
月今宵汝を主に酒酌まん
三田稻門と昼の喊声
勢子掛けて幾山越えし櫓明り
ロケイションには遠い三面
落老いて峠田の桜ほころびぬ
家毎に銅ふ瑠璃や鶯
想い病む遊女の部屋の春小袖
氣だて優しく町に炭売る
縁談に仲人話長くして
夜更にひゞく支那蕎麦の笛
貧生に森川町は寒かりし
特選の札燐とかゞやく
甲子園は地元チームの勝ち残り
鳶に豆腐を攫はる、憂き
院坊も余剩住居の梓の内
表札は聞き知らぬ名ぞ月の門
道二叉を迷ふみなしご
星占に人立つ背戸や夜の秋
筹が出る古い虫干
筹は沖に網下ろすらん
夢に見し母国土を今日踏みぬ
おばこおけさや木曾節の春
窓を洩れ来るミサの歌声

若葉の巻

白崎春茨 渡辺阿きら
尾崎行人 初折五月二
十八日行人居、二折六月
四日行人居

通されて二階眩ゆき若葉かな
まゐらす茶にも夏空の雲
伝説の池のほとりの立チ葦簾
薬草採りに猿の臂當
山歌にたどりし月の河童橋
宿へ栓抜借りに行く露
秋鱈を冲の小舟に料理ける
秘蔵の軸を掛けかへる床
掌中の玉おひくに臺が立ち
小者長屋の口のうるさ
ありし日の母に似してふ衣更
芝居土産の箱は音羽屋
敷石の錦小路に月さして
遠見の岡は松ばかりなり
散る花の静心なし男坂
霞む天主に一羽舞ふ鳶
御神樂の古りにし幕や春祭
峠に見ゆる敵の軍勢
赤々と夕日のもみぢ吹散らし
老いて書見の外は人の世
つくばひに一片おける朴の花
人目には素振も見せぬ煙草買
相合傘に生憎な道
此頃は座敷へ帽子持込んで

人ら茨人ら茨人 茨人 茨人

阿
き
ら

おけさ 踊つて見せる先生
るさとの浜に碎けし月の波

恋に律義が邪魔な父親

北満に家の子あまた夏の月
「ケンタツキー」の遠く聞こゆる

子人

鳥賀鉢舟のともす頃おひ
動かざる地平の雲よ彼岸花

歌聲遠く行くは誰が子ぞ
堀内の柿はいつしかもぎ取られ

町田へ買つた地所の見分

注 渋谷のあたり夕霞なり
寺田寅日子氏の句をいただき立句とする。
芳

畠打の巻

恋に律義が邪魔な父親
峠越す夢遠し七日月
吉野の雨に枚方の里
見出でたり花間に白き測候所
子供遊ばす道の青草
相宿の小暗き部屋は寒うして
馬の賞状金も剥げたる
年寄と言はせぬ蕎麦の打加減
長逗留にさすが飽きられ
旅なれやバスの車掌を賞でにけん

北満に家の子あまた夏の月
「ケンタッキ」の遠く聞こゆる
鐘一つ叩かれに行く身の因果
袖は七分のスー^ツ流行りと
丸ビルの窓を斜に初燕
それと合図に日傘くる(＼)
昂座が別れの刻をきざむ迄
ガスの北見に歎く海猫

春 落 紅 彩 人 落 子 人

渡辺阿きら 尾崎行人
中山四運一 高橋立路

石黒桃里 石黒觀子
六月十八日行人居
高橋立路 白崎春茨
尾崎行人 石黒觀子
十一月二十六日行人居
初裏九句より

残雪の峰いかめしき畠を打つ 阿きら

寄生木は鎮守の森に霞むまで 四運一

旅の身に霧笛は寂し北の月 桃里

用もなき夜長になりとて按摩呼び

終列車おりる二人に犬吠えて

訛なき北京官話も齒切れよく

破ら家に鍛冶打つ爺の日もすがら
叢子

花そばの巻

朝比奈路子 川上久之
舟本紅彩 尾崎行人
九月二十二日於分水莊

恋に律義が邪魔な父親
峠越す夢遠し七日月
吉野の雨に枚方の里
見出でたり花間に白き測候所
子供遊ばす道の青草
相宿の小暗き部屋は寒うして
馬の賞状金も剥げたる
年寄と言はせぬ蕎麦の打加減
長逗留にさすが飽きられ
旅なれやバスの車掌を賞でにけん
留守のたよりを膝に朝の茶
沈丁の香にそゝろなる歌ごゝろ
谷のしぶきに絵筆濡らしつ
奥利根も若葉の道に人の声
席を外してあふぐ大空
月の露多摩の河原に野立して
鳴鳴くかたや百草高幡
秋深み越路の茶屋の鎖すらん
片帆わびしき沖の雪ぐも
貝鍋に樽あけにけり今年味噌
都の客に句会廻状
みすゞ生ふ穂屋野に花を守りつゝ
鉈研ぎおへし春の黄昏

北満に家の子あまた夏の月
「ケンタッキー」の遠く聞こゆる
鐘一つ叩かれに行く身の因果
袖は七分のスース流行りと
丸ビルの窓を斜に初燕
昂座が別れの刻をきざむ迄
ガスの北見に歎く海猫

立句大竹孤悠 尾崎行人 白崎春萍 昭和二十五年五月十四日
於分水荘 表十八句まで

昼深しすでに薄暑の地のほめき
桐の落花に遠き浅間嶺
訪ふ人もたえし疎開の住居にて
紙魚をつぶして指のわびしき
薯と豆月に供へんせばき庭
汽車とゞろかす露の大橋
秋潮や要塞朽ちて草の丈
踏み迷ひたる友の呼ぶ声
山稜に立ちし面輪の消しがたく
嵐すぎても延ばす滞在
言訳の言葉も今は出尽して
インデラといふ象を見に來し
此の町の天主に昇る夏の月
神棚に火を砌る音の珍らしく
祭に芝の意氣を忘れず
言問も花の寮歌もいく昔
オール持つ手に春を惜みつ

拾遺句の出典は「尾崎喜八詩碑建立記念誌」、「高原の自然と文化」尾崎喜八特集号、

富士見高原療養所句誌「白樺」、小林わたる氏句帳、名取正人氏収集の遺墨集（写）中の色

紙、尾崎栄子収集の色紙コピー、鎌倉文学館・

富士見町高原のミュージアム・追分宿郷土館に寄贈した色紙、木曾奈良井越後屋旅館所蔵色紙、木曾開田高原木曾馬牧場句碑等による。

連句注

連句三巻は「かびれ」誌に掲載されたものなので後につづく穂屋野歌仙とは区別した。

穂屋野歌仙は尾崎の外は日頃俳句をたしなまない人々も連衆となつて詠んだもので俳諧の資料としては不適當な出来かもしれないが、時代・世相・各自の抱える不安を振り払い、乗り越える為に尾崎が薦めた知的ゲームではなかつたかと推測し、資料の一部とする事にした。穂屋野歌仙という名称は後出の村野夏生氏の命名で他の連句と区別するのに誠に当を得た呼名と思ひ使わせていたゞく事にした。年代の記載のないものが多いが、連衆の方々が分水荘を訪れた時期と照合すると昭和二十二年から二十七年の間として間違いないと思われる。

（尾崎栄子）

「行人句抄」にそえて

伊藤海彦

りとのぞいている。

それはともあれ、ここにとりあげた二十句は、その蘇った亡靈たちの仲間——詩人自身のえらんだ五十句と重複しない作品ばかりである。棄てたものをまた拾うな……と先生にお叱りを受けるかもしれないが、本人が善しとしたもの心らずしも最上の作とは限らない。詩人、尾崎喜八が俳句というものをどんなふうに考えていたのか、そしてまた俳句との出会いや訣別についての細かな経緯などを私はついに詩人の口から直接聞くことなく終ってしまった。いつも詩や散文、あるいは自然、音楽……と話題がほかにありすぎたためかもしれないが、いささか残念な気がする。今となつては詩文集第七巻「夕映えに立ちて」に収められている「未消ゆるこころの波」という文章によつて、詩人の心の微妙な移りゆきを想像するほかない。詩人はそこで、句帖を焼き棄て、句作と別れようとする日のことをいくぶん感傷をこめて書いている。が、それから五年後の昭和三十三年、古い気象観測簿をひっくり返しているうちに思いもかけず俳句を書きこんだものが姿を現わすのである。（よみがえった句）詩人はそれに対して「過去帳から姿を現わした亡靈共」などといつてはみるもの、夫人のすすめにしたがつて五十句をえらびだしている。そこにつけ加えられている「つい愛著を新たにするような句もつか二つはある」という言葉にはへいつたんいさぎよく思い切つたものに、今さら未練たらしい顔ができるかい」といった下町つ子の強がりのよつな、照れのよなものがちら

りとしたかと推測し、資料の一部とする事にした。穂屋野歌仙といふ名称は後出の村野夏生氏の命名で他の連句と区別するのに誠に当を得た呼名と思ひ使わせていたゞく事にした。年代の記載のないものが多いが、連衆の方々が分水荘を訪れた時期と照合すると昭和二十二年から二十七年の間として間違いないと思われる。

私は先生の句をいまここで解説したいとも思わないし、その分でもないが、ただひとこと書いておきたいと思うのはその率直な美しさである。いかにもこの詩人の性情を表わして妙にひねつた所がない。奇をてらつた現代風からは遠く、むしろ形は保守的だが、その言葉の切り口は鋭くさわやかである。専門俳人の作とも文人俳句とも異つた視線がそれを支えていると私は思う。昭和十九年頃から打ちこんで、二十二・三年頃に最も熟した領域へ入つた尾崎喜八の俳句。それは詩人に改めて言葉の抑制を教えたのではないだろうか。たとえ他の事情がなかつたとしても、詩人の俳句はやがて「花咲ける孤独」の詩群のかげ

に吸収される運命にあつたような気がする。

(伊藤海彦撰 山室眞一木版摺)

昭和六十年二月四日 限定三十三部)

尾崎喜八と俳句

「山火」より

渡辺 勝

山の詩人尾崎喜八と「山火」との関係は浅くない。先師蓼汀主宰時の「山火」の昭和二十九年三月号の巻頭には、「氷の下の歌」という隨筆を寄せている。一部引用してみよう。

まつさをに晴れた二月の午後、私は八ヶ嶽の連峰とその広がりとをうしろに、南北に長い或る丘陵の中腹の、風をよけ日光をうけた半円形の窪地の斜面で、乾いた禾本科の枯草の中にすわつてゐる。

正面には積雪の釜無山脈がその柔かな曲線から成るすべての山肌を、或ところでは白金の焰のやうに燃え上がらせ、或ところでは透明な龍膽いろや水苔の色にこぼらせながら、きびしく、然し大らかに、やがて来る春を待つ深い眠りをねむつてゐる。そして私の足の下のほうでは、此の丘陵の裾をめぐる堰の水が、小豆いろに光る捩木や野薔薇の藪にかくれて、時々ちろちろと音をさせて流れてゐるが、その得もいへず澄んだ鈴のやうな水の音が、雪に被はれた此の山あひの田園の、まばゆく深い静寂のなかでのたつた一つの歌である。

私はこの透明で金属的にしつかりした水の音がほんたうに好きだ。信州のもつとも寒いとした冬枯の自然の思ひがけない片隅から、あの無垢な喜びと純潔の歌を聴かせる氷の下の水の音。私のために貧しくてもなほ清く健かな生活の美を証言し、詩によつて豊かな心を肯定してくれながら、じつと耳を傾けてゐる私の足の下で、はじめて、楽しげに、歌ひこぼれ流れる水。この水の高原のせせらぎを私は今までにも既にいくたびか讀へて來たが、彼等に対する私の讃美と感謝との思ひは、今後もなほ詩となり文章となつて、その時々に繰り返されることだらう。

昭和二十九年といえば、七年間の富士見高原での生活を終えて東京に戻った二年後である。この文は、創文社版の尾崎喜八詩文集『夕映えに立ちて』に收められており、そこでは昭和二十六年とある。御遺族の指摘では、當時自發的に書いておいたものであろうとのことである。短文ではあるが、喜八の文章の全エッセンスを伺わせるような引き締まつたよい文章である。

しかしながら一方には数の上でこそ及びもないが、純正な俳句、文学として俳句を勵み楽しんでいる少數の人たちもあつた。その人々はそれぞれに「ホトトギス」「馬酔木」「夏炉」「雲母」あるいは「山火」などへ投句していた。高原療養所の患者のなかにはその種の人があつとも多く、他は山麓のいくつかの集落に一人一人と散在していた。

また、あの信濃の一角をついのすみかとしている人びとのことをいえば、彩蠶 燕覆子、

この隨筆の載つている書籍を、自分の書棚から放逐したというのも、彼の人間的エッセンスを伝える挿話である。

尾崎喜八が俳句に親しんだのは、比較的早い時期だった。久保田万太郎や小杉余子の作品、とくに後者の句から、詩よりも先に俳句藝術といふものに眼を開かされた。が、その後、外国文学や高村光太郎等に影響を受けて詩に専念するようになる。中断していた俳句を復活させたのは、詩人を介して知った「かびれ」の大竹孤悠を、中央の有力者たちに紹介したことが機縁となつて、ときどき「かびれ」に出句するようになつたことによる。行人と号し大竹孤悠や若き小松崎爽青らと吟行や、連句を共にしてゐる。

ところで富士見高原滯在中、土地の人びとは喜八を彼らの句会に招待した。しかし、当時地方では、いわゆる宗匠俳句、月並俳句会が盛んだつたようである。喜八はそうした句会に辟易する。

桂雪、白樺らの諸君が、その故郷の雄大な自然や生活や、それに寄せる晴朗な詩心の躍動から、次第にそれぞれの力を發揮しつつあるのを私は頼もしいものとして注目している。

(「未消ゆるこころの波」)

文中、桂雪とあるのは、小林わたる氏のご尊父で、「山火」元同人の故小林桂雪氏である。

喜八は俳句創作に強い魅力を感じたが、やがて詩という一生の仕事の上に、この課業を加えることはきわめて困難となり、作句の道を断念し、今までの句帖を焼く決心をして、そこばくの感傷をもつて別れを告げた。ところがのちにその自作に再会することになる。

それというのも、別に折りにふれてメモ風に書き留めてあつたものを夫人が丹念に収録しておいたのである。その五十句のなかから佳句と思われるものをここに収録してみよう。(「よみがえった句」から)

お疲れといふたそがれの頬かむり
風花や上り待つ間の下り汽車

頬白のつぎつぎと立ち冬木原

厳寒の背革も「大気物理学」

雉子鳴くや清貧妻を研ぎ照らし

花しどみ流離といへど天地かな
邯鄲の細みふくらみ一節に

とんぼとんぼ夕日の村となりしより

山焼くは泉野村かうつけぶり

野辺山の野を焼く煙日もすがら

畦塗つて夕日塗りこめんばかりなり
物種のあはれ一匁といふ枡目

いつのまに大きな春の雲となりし

笛孔の漆の朱や草青む

路に画架春泥の色重ねをり

春愁の坂をくだりて転任す

車窓春若き赴任の眸もあらむ

(その他から)

をりをりの汽笛や霧の向山

花蕎麦や蜜蜂金のつぶてとも

きさらぎや苔をはぐくむ雨細し

残雪のからからとある疎林かな

お疲れといふたそがれの頬被り

諏訪地方では、晩の挨拶に「お疲れさまでござります」という。季語はこの場合、「頬被り」であろう。知っている人か知らない人か、

頬被りで顔は見えないが、声は人情のぬくもりをもつて交わされる。よそ者として来た信州に暖かく迎えられた喜八夫妻の安堵感もうかがえるようだ。

厳寒の背革も「大気物理学」

喜八は気象、雲に詳しかった。その緻密、

正確さは自然科学者のそれであつた。「……

藤原咲平さんの『雲を摑む話』の方は、これ

も同じ年に手に入れた物だが、さすが岩波書店発行のせいか、今なお堅牢でびくともしない。……岡田武松博士の『気象学』上下二巻と『気象学講話』も健在である。(「書棚の一角」)

花しどみ流離といへど天地かな
大戦中はごく少数の詩人を除いて等しく愛國詩を書いたが、喜八は「此の糧」等一連の詩で、たとえそれが真率な感情から生まれ出たにせよ、結果的には戦争協力詩をうたつたことになり、戦後は石をもて追われるごとく、世間を離れて富士見高原で隠遁者の生活に入り、新しく生き直そうと願う。その「流離」はしかし詩人の内面をむしろ磨かせ、新しい境地を獲得させてくれるものであった。「雉子鳴くや清貧妻を研ぎ照らし」。「貧」もまた一つの力ある属性なのであつた。

邯鄲の細みふくらみ一節に

「かんたんの歌は遙か遠くの村里で鳴いていり」の声か、風に送られて来る哀切な笛の音を想わせる。その長い緩やかな音の流れには旋律もなければ拍節もない。かすかに震えながら耳から心へ伝わって来るその一節の音の糸には、悲しみにせよ祈りにせよ、何ら人間に強いるところがない。ただ、星が光り、風が渡り、平野の夜のひろがりが大きくなつてゆく其の事のように、その歌も無限であり無量である。(「かんたん」)

笛孔の漆の朱や草青む

喜八は富士見高原時代ブロックフレーテの練習に励み、それを楽しめるほど上達した。「私はルックサックの紐をほどいて、茶色の羅紗の柔らかい袋から一管の小さい縦笛を抜き出す。……さてルックサックをかたえに、

折り敷いた緑の草にすわりこんで、私は笛の八つの孔に指を置く。そしてまず何にしようかとちよつとの間思案する。そうだ、ドゥヴォルザークがいい。あの交響曲『新世界より』の第二楽章、そのラールゴの髪頭にイングリッシュ・ホルンが静かに歌いだす「家路」のメロディー。あの甘美で望郷の思いをそそる歌ならば元より好きだし、そらでも大丈夫だ。そこで息を吸いこみ、息を矯めて柔らかに吹く。澄んだ音は流れて草の上をゆき、晴れやかな涼しい丘に散つてさまよう」(私と笛)

車窓春若き赴任の眸もあらむ

主人公はあの詩「田舎のモーツアルト」の女先生であろうか。

中学の音楽室でピアノが鳴つていて。生徒たちは、男も女も／両手を膝に、目をすえて、／きらめくような、流れるよう

な、／音の造形に聴き入つていて。／そとは秋晴れの安曇平、／青い常念と黄ばんだアカシア。／自然にも形成と傾聴のあらこの田舎で／新任の若い女の先生が孜々として／モーツアルトのみごとな口

ンドを弾いている。

すでにかかるように喜八の作品は、自然をよくみて自然のなかから生まれる写生の句である。その点は、彼の詩と違うのだが、詩の方がかなり氣負いがあつて意図的な響きを聽かせるのに対し、俳句の方はあまり構えていない。喜八の詩に対しては、これが彼の持味

もあるのだが、「装飾性」「ヒューマニズム

にポエジーを奪われた詩人」といつた批評的な言葉がある。だが、彼の俳句にはこれは当てはまらない。彼の俳句観を示す言葉がある。

此處に十七文字の芸術が成り立つ為には省略が必要であります。含蓄が要るので。十七文字の中から大きく展開し発展して行くのは含蓄が必要なのです。そこで俳句には季感と言ふものがあつてその御蔭で初めて含蓄が生れ、省略が成り立つのです。季感があつて此處に土台になる雰囲気が出来上るので。

(富士見高原療養所内句誌「白樺」)

この省略の文学は、ともすれば冗長となりがちだった若い時の詩風を引き締めることに寄与しなかつたであろうか。喜八は作句を止めたが、そのかわり、すぐれて慧眼の俳句観

な、虚子とリルケの世界が同じだと言つてゐるのではない。擬人化が窺まって天使まで呼び出さざるを得ないリルケと、造化の妙に参入する東洋的無為とは自ずから芸術的境位を異にしよう。ただ、対象に注ぐ愛の強い眼差しが共通するのだ。茅野蕭々の訳詩集『リルケ詩抄』に大きな影響を受けた喜八は、リルケの事物詩(Das Dinggedicht)に惹かれる。

喜八は、比較する場合ともすれば陥りがちな、虚子とリルケの世界が同じだと言つてゐるのではない。擬人化が窺まって天使まで呼び出さざるを得ないリルケと、造化の妙に参入する東洋的無為とは自ずから芸術的境位を異にしよう。ただ、対象に注ぐ愛の強い眼差しが共通するのだ。茅野蕭々の訳詩集『リルケ詩抄』に大きな影響を受けた喜八は、リルケの事物詩(Das Dinggedicht)に惹かれる。そして從来の冗漫になりがちだったおのれの詩風を省みるのである。

澄む水や蟹ひそむ石起しても

まことにすぐれた一句であり、「物」の句である。そして秋桜子さんに物に即した秀句の多いのを、私は彼の俳人生命の長続きする徵候だと思つていて。思いをひそめて見れば見るほど物はわれわれにそれ自身を語り、しかもそれ自体けつして尽きることがないからである。

(祝詞に代えて)
この文は秋桜子芸術院受賞に際しての祝詞の代わりである。喜八は「馬酔木」の客員でもあつた。「物」はリルケから來ていることとは言つまでもない。

俳句は、評釈者によつて作品の世界が、大きくふくらんでくる。作者・作品・評釈者の三者照應の世界である。それは俳句の短い詩

て空から笑みを注ぐのだらうか。/それが句のように鷹揚に消えて行くとき、/優しくうけとめてやる天使等がゐるのだらうか。

(尾崎喜八訳)

型からくるが、それが貧しさではなく、逆に豊かさを生んでいる独特な文芸だと思う。

(「山火」平成四年六月号より転載)

風雅逍遙抄

「かびれ」より

坂本波之

流年三十

新らしい年の私の机には、新刊の二冊『孤悠連句集』と尾崎喜八詩文集『夕映えに立ちて』が置かれてある。連句集は昨年の秋、詩文集は暮に出版されたのであるが、大急ぎで読む類の本ではない。それで私は、正月になると『孤悠連句集』とその話になると、「あの時、爽青君が孤悠先生に附けては叱られ附けては叱られましてね」とお笑ひになるが、行人先生ご自身、薄氷を踏むおもひであつたこと、波之は思ひますがね。そのなつかしい「春雲の巻」が昭和十八年で、後年（廿四年十二月）尾崎さんは日立を訪はれて、

人はみな師走日立の太煙
臼彫り直す軒の山茶花
ちんちんと雀来るより昼闌て
銭落ちし音して水の艶なり

行人
孤悠
爽青

に踏出す三十六歩の「日立の巻」を記録されてゐる。この巻などでは、すつかり附合ひの

しに豊浦、高萩、磯原、五浦を経て平潟から勿来まで、春の海ひねもすのたりのたりと歩き、行き暮れては、いぶせき浦の宿に泊つて、さて一巻といふことになつたのは因果であつた。何がさて連句となると手も足も出ない。失礼ながら尾崎さんとて思ひは同じであらうと拝察しながら、ともかくも、

呼吸が合つて、実に堂々として無駄がなく、寺田さんのいはゆる撰択的裁断の技術、つまり、モンタージュに成功してをられる。

後略

（「かびれ」昭和三十四年三月）

春雲の巻の事

かびれも三十五の壯年になる。つい、きのうの事のようでもあり、遠い、ながい歳月であつたようにもおもえる。八年前に爽青さんの編集で刊行された『孤悠連句集』の扉に、孤悠先生は、小さな活字で、わずか二行半の序を書いておられる。

自分で書いた連句を見ると、涙を催すやうな懐かしさを覚える。それは連句が連衆を持つてゐるためであろう。大竹孤悠なんという、含蓄ふかい言葉であろう、この連句集は、かびれ創刊の年、つまり昭和六年に書かれた「水艶の巻」を冒頭にしている。連衆は、作家の野村無名庵・落語家の柳家小さん・桂文都などで、

が発句。以来昭和三十一年まで三十巻に及んでいるが、波之も昭和十八年の「春雲の巻」でご厄介になつた。

そして、或る年の晩春、どうした風の吹き廻しか尾崎さんを誘つて日立を訪れ、孤悠先生と爽青さんとの一行四人、日立海岸を派出生とわたらるおつき合ひである。そして、この俳人と詩人とを結びつける機縁も偶然とはいへ、私が中介の光榮になつたのである。

悠先生とは二十七年、尾崎さんは三十二年にわたるおつき合ひである。そして、この俳人と詩人とを結びつける機縁も偶然とはいへ、

阿武隈は山みなおなじ春の雲 行人

を発句としたもので、行人は詩壇の老宿尾崎喜八。孤悠の脇、波之の第三、爽青の第四で、日立市から陸前浜街道に沿つて勿来までの、一泊二日の連句の旅であった。

おもえば、すでに二十三年のむかしで、あの頃は連衆もみな健脚であつた。なにがさて生れてはじめての連句で、作法も何も知つたわけではなく、孤悠先生の指南で、苦吟連続の大難行。だから、道中の風光など眼中になく、後日、尾崎さんから頂いた荒磯松や海岸の砂の風が描いた美しい縞模様などの写真で、あゝ、こんな所も通つたのかと、思い出すようない始末である。

その旅で、たしかどこかの浜道で、波之は駄鳥の玉子ほどの大きさの赤い石を拾つた。大理石でしよう、と尾崎さんはいわれた。波之は帰京してから近所の石屋に頼んで、二つに割つて断面を研磨して貰つた。まがうかたなく大理石であつた。波之は、尾崎石と命名してそれを行人先生に贈り、残り半分を今に所持して、この連句の旅の記念にしている。春雲の巻は、

花咲かばまた訪はましと契り来て 行人
霞の奥に霞むみちのく 孤悠

と、めでたく結ばれたが、この孤悠先生の揚句をよんでもいると懐旧のおもいに堪えない。

その後、しばらくは連句のおもしろさに取りつかれて、戦中尾崎さんが疎開された信州の富士見高原の山荘を訪い、

富士見せぬうらみはいはじ夏霞 波之

と挨拶、夜を徹して一巻をあげたこともある。

あれからもう二十年。行人先生は多摩川のほとりの淡烟草舎で春霜のごとくよいよ明澄、孤悠先生はちかく古稀の賀をむかえられる。
（阿武隈は山みなおなじ春の雲・霞の奥に霞むみちのく）あはれ、いのちあればこそ、遠い日の短い一會の思出にも涙さしぐむことができるのだ。（＊1 戦後の誤り ＊2 流寓）

（「かびれ」昭和四十一年三月・風雅逍遙 十七）

ふかい“東京の書斎”から、北鎌倉は山ノ内明月谷へ転居されたのは昨年の末であつた。明月谷、近くに明月院なる寺院があるのでその名があるのか、明月谷あつての明月院かあきらかに寺領であつたことを示す地名である。

戦後すこし落付いてから、行人先生を中心とした行人会をつくり、毎年十三夜の日に集つて句会と懇談をする。もう十数年つづいているが、会には原則として夫妻で参加というきまりがあり、行人先生御夫妻と会員四組の夫妻の出席で、その日は、否応なしに、日頃は俳句を作らぬ婦人たちも席題を課せられる。そのたどたどしい十七字がご愛嬌で、行人先生の選に入つたりするのである。

会場もその年の当番がきめ、自宅やら料亭やら、いちどは淡烟草舎の時もあつた。十数年欠かさなかつた行人会も、一昨年は波之の病気で流会、昨秋は軽井沢の加藤真暉子さんの山荘を提供して頂くことにまでなつたが、行人先生の急な旅行で、ついに流会となつた。どうも流会つづきで残念であるが、今年の十三夜は、明月谷でと今からひとり定めしている。

賀状の余白に書き添えてあつた。行人先生が戦後、信州富士見高原の分水荘から帰京、ようやく住みついた世田ヶ谷の玉川上野毛。広い庭と樹木と草草。その野趣と何よりも書斎中心の閑雅な住居をみずから淡烟草舎と名付けて、七巻の尾崎喜八詩文集もまとめあげて、めでたく古稀の寿をむかえられた、その思出

三夜月を賞して洗心させてやりたいというの
が、行人先生と波之の思いやりであつた。

中略

行人先生、明月谷のあたり、或は明月院の
寺苑に、静かに咲き静かに散るサクラはあり
ませんか。どうやら、われわれの世紀は終末
にちかいようです。それまではせめて、春は
花を、秋は月を、冬は谷を埋めつくす雪を眺
めて純無垢の時を、しばし過したいものです。

〔かびれ〕昭和四十二年四月・
風雅逍遙 二十七より転載

行人連句

穂屋野歌仙

村野夏生

鋸目すゞしき

●イメージとしていつも心の中であたため、
掌の上で転がし、遊んでいる、クジラであり、
カバであるならばよろしかろ。雪女も又いい。
だが、「植物がない。植物がない。何ぞ秋の植
物でも」と、歳時記の上を行つたり来たり周
章狼狽する姿は、我ながら浅間しい。一得一
矢。歳時記といふものは便利ではあるが、と
きに死語（ちよつと一般と使い方が違うか）

な？ 言葉は使い手によつて生きたり、死ん
だりすることしばしば 集でしかない時が多
い。心すべき……。

かつたことは、私の
阿武隈は山みな同じ春の雲

●そんなことを考えたのも、行人・穂屋野歌
仙に出会つてからだ。

生き生きと躍動する自然、個性的な眼（と
いうか言葉）の中に捉えられた自然、確かに
その裏に人間＝詩人がいて、うたつているな
と感じさせる自然がそこにはあつた。

月並でない、歳時記でひらつて来たのでは
ない自然が。

●昭和三十三年九月、『孤悠連句集』上梓さる。
大竹孤悠。明治二九年、山形県米沢市生れ。

昭和六年、茨城県日立で俳誌『かびれ』を創
刊主宰する。後進指導の合間に、落語家・柳
家さん／桂文都／作家・野村無名庵／詩
人・尾崎喜八／宗教家・室賀春城などと巻い
た歌仙を集めたのが全書。

この連句集には昭和六年から昭和三一年ま
での二十四巻が収められているのだが、中に
行人＝尾崎喜八氏の参加したものが二巻入っ
ています——というのは八王子市在住の大津
恵子さんのご教示。

●「春雲の巻」（行人・孤悠・波之・爽青／昭
和一八年）

「日立の巻」（行人・孤悠・爽青／昭和一四年）
行人すなはち、詩人・尾崎喜八であつた。
『尾崎喜八詩文集7夕映えに立ちて』に一文
あり。

人はみな師走日立の太煙 行人
太煙は、今は取りこわされたか、ご存じ日
立の大煙突。太煙で詩になつたか。ついで恋
の座に

——それにしても彼孤悠氏やその高弟小松
吐息ともえよかぎろひの中
くちづけてはた忘れゆく春の水

爽青 行人

を立句とした一聯の歌仙と共に、今もなお
きのうのように悲しいまでに懐かしく思
出されるのである。それは戦い破れていよ
いよ慕わしいものとなつた旧山河の春であ
り、救いなき頽廃の中でますます胸を打つ
美しい芸術的歓会であつた。（以下略）

〔未消ゆるこころの波〕一九五四より
ちなみに、波之は詩人・坂本七郎。爽青は
現「かびれ」主宰。

●ごく手近なところで行人歌仙に出会いたい
と思われる方は、東京堂発行の『連句辞典』
(東明賀他一編) を繙かれるがいい。人名
篇、大竹孤悠の作品例に「日立の巻」が乗つ
てゐる。この一文、穂屋野歌仙のご紹介が眼
目だが、チョト寄道。平命であつて俗ならず、
面影に通う端正な詩人の姿勢がかいま見られ
はしないか。

●で、「日立の巻」。末句は行人。

「流れの岸のひともとは、の本歌取り。み

そらの色の水浅黄だつたか？すこし先へ行つて、

富士見せぬうらみは言はず夏霞　波之
　　登のしじまを遠い郭公　行人

(「夏霞の巻」)

屋野の地である。この稿つゞく。

みすゞ生ふ穂屋野に花を守りつゝ、行人

人

昼閑か飛鳥といへる香炷かん　行人
大和障子の日綾さらさら　爽青

　　昼深しすでに薄暑の地のほめき　孤悠
　　桐の落花に遠き浅間嶺　行人

(二つ折「薄暑の巻」)

孤悠連句集／行人穂屋野歌仙

とはまた優雅な。そして花も行人。

れきろくを円かに包む花幾重　行人
火の見の影を曳ける遅き日　孤悠

　　れきろくとは、難しい言葉を使つたもの
　　だ。「轆轤」。新潮国語辞典あたりでは出で
　　ない。車のとどろき、またそのさま。

●この歌仙、客ではあろうが発句も月も花も

行人、というのが或はキズか。今ならば順づ
けでもさわりの句は順序を変え、人が重なら
ないよう配慮するのだが。また、この一巻

での詩人は「学者の町にどこのオルガンへ頼
みもせぬに手伝いに来る」見覚えのある下駄
の焼印「夢すでに飛ぶ越の海山」と軽い、や
り句も見せて、手練れである。

●その行人に穂屋野歌仙とでも呼びたい一群
の作品がある。全部を紹介したいのは山々
だが、それは無理なので発句十ワキのみ一部
抄出してみよう。

姨捨の駅の高さよ花杏　行人
信越線は芽木の山陰立路　(「姨捨の巻」)

通されて二階眩ゆき若葉かな　寅日子
　　まるらす茶にも夏空の雲　行人

(ワキ起し「若葉の巻」)

残雪の峰いかめしき畠を打つ　阿きら

野薔薇に近き水口の音　行人

(「畠打の巻」)

花蕎麦の雨となりたる裾野哉　蕗子

鋸目すゞしき榛の切株　行人

(「花そばの巻」)

●前回、「孤悠連句集」に触れたところ、日立
市本宮の小松崎爽青氏から同書のコピーを賜
つた。深謝！コピートリと zwarても、ほの赤い
厚紙で表をくるんだ美しいもので、見返しに
孤悠の一言。
——自分で巻いた連句を見ると、涙を催す
やうな懐しさを覚える。それは連句が連衆
を持つてゐるためであろう。大竹孤悠

●連句の魅力を一言で言い得て妙、である。

●『孤悠連句集』中、行人尾崎喜八の加わった
歌仙二巻。

『日立の巻』は既に(前回)読んだ。今ひとつ
の『春雲の巻』(行人・孤悠・波之・爽青四)
吟を見よう。

●ホ句は行人。

阿武隈は山みな同じ春の雲　行人
頬白鳴いて松の花降る　孤悠

●芭蕉に句がある。「雪ちるや穂屋の薄の刈残
し」(猿蓑)。行人がこれらの歌仙を巻いたの
は、第一次大戦後、傷心の身を寄せたその穂

に始まり、初裏シオリの花を孤悠。

初花に醉のきすぎし膾して
空は鬱金に春暮るる町

人 悠

句ノ花は客人に『持たせて』

花咲かばまた訪はましと契りきて

霞の奥に霞むみちのく 人

ものにしても、戦後、詩人は自ら激しく己れを責めた。

●鳥見迅彦氏の追悼詩はこう謳う。

(略)

もしやあなたの悔いは今なおつづいてい

るのだろうか?

「愚かさによつて世界の不幸への共犯者」

「敗戦と同時にあなたの『樂天的な理想主義』があえなく潰え、

とみずからを断罪した日から

苦がく渙くそして長くあなたを苛んだそ

の悔は?

- 昭和十八年。何とも樂しき春の張行ではなかつたろうか。
- だが、破局はくる。昭和二十年八月十五日降服、終戦。

戦中、家は空襲で焼け出され、『花咲ける孤獨』の後記にもあるように「戦争がおわつても住むに家がなく、一年近くを親戚や友人のもとに転々と寄寓し、最後に未知の或る人の厚意でその信州富士見高原の山荘におちつくことができ、ついに七年という月日を其処でおくるに至つた顛末とその間の生活について行きついた富士見高原すなわち「穂屋野」での詩人の心を深く慰撫したのが俳句とわが俳諧であつた。

●『雪ちるや穂屋の薄の刈残し 芭蕉』。冬の

信濃路を行きかかると、野山のこかしこに、

刈り残しの薄のすがれた姿を見かける。信濃

の薄といえど、かの有名な御射山祭（七月）

のことが思われるが、今はその祭もとつくな

終つた冬の信濃路であるから、ちらちらと雪

の降りかかる刈り残しの侘しい薄に、かの神

事の佛ばかりを偲びつつ行きすぎることであ

るヨ——と小学館版「日本の古典・芭蕉句集」。

●戦中、愛国詩を書いた。詩人の本然からの

昔、S社でご一緒しました、村野夏生であります。週刊に居りました。ご記憶にありますでしょうか。お元気でいらつしやいますか。

定年退社後、いろいろありまして、これからは身を狭く生きたいものよと、足ウラを天井に引つくり返つておりましたが、先日フト三階屋根裏の古い紙袋を整理しましたところ

△行人尾崎喜八先生の直筆の貴重な連句稿

ナル一包みが出て来ました。

表を見るに同時に記憶がドツと押し寄せて、思わずタラタラと冷や汗が流れるとい

うのはこの感覚でしょうか。当時私は週刊

のデスクの他に、北は網走から南は沖縄・

浦添あたりまで、一週に一度の飛行機でゆ

く美術館探訪のページを持つという、まさ

に墨突クロまずの生活を送つていたのでし

た。お預りしたまま感想を書く場所も時間

もなくその折何とご返事したか、ここで改

めてお詫びしなくてはなりません。栄子さ

ま、ほんとうにごめんなさい。

屋根裏に眠つていたコピーを改めて読み

直して、びっくりしました。まずはその言葉の生きて新鮮なこと、自然を見る目の確

かなこと（前回ご紹介したとおり。）隆盛の

陰に衰態を秘めた現代連句に比してこれら

歌仙の言葉の初々しい事いうまでもあります

せん。心の中のクジラでありカバではない

●前略。突然にご免ください。

唐突ながら、である。

●戦中、愛国詩を書いた。詩人の本然からの

でしようか。昭和二十一～二年という、戦

後俳諧の片目もあかない頃、雪深い信州・富士見の地でこの様な素晴らしい歌仙が巻かれていたという驚き。活字にしてぜひご紹

介させて頂きたいと念うものです。遠いお約束を今、果せるような気がします。なぜもっと早くと、申し訳なかつたともうれしいとも思い様々あります。

鎌倉市山ノ内尾崎栄子様村野夏生拝

●尾崎栄子さんは詩人のお嬢さん。そしてここまで来ていうのだが、(行人穂屋野歌仙)はまだ活字になつていない。まだ活字になつていない詩人の句稿が私の手もとにある経緯は右の通り。句稿コピーに添えられた栄子さんのお手紙が、当時の富士見高原の「座」の在り方を生き生きと伝えてくれるのでお許しを得てこの稿更に次回に続けたいのだがよろしく。

野の復活祭

●ある出版記念会の席上で、今は亡き松方三郎氏がこんな意味のことと言わされたそう。

「尾崎さんと歩いている時は、蝶を見ても、ただ『蝶々がいる』と言つたのではいけなくて何々の何蝶がいると言わないと承知して貰えない」

何々の何蝶とうたう精神が、すぐれたものを生むのだろう。

山中に曆日なけん大藁家
炬燵仕舞へばがらんどうな里
(夏霞の巻)

波之行人
波之行人
波之行人

月の出や熔岩大地雲散りて
貂アマ異かけに秋草の窪
(芹摘の巻)

また

外濠の水にはなやぐ夏の月
ライタアぱちと待つは蜜豆
立路行人

（芹摘の巻）

●このような付け合、好きだし、いいな。重厚篤実なその詩風を知る読者には意外や意外、行人句は軽い。生活の実感を踏まえながら、機智一閃。内にユーモアを湛えて、というやつだ。戦前、戦中と渡辺白泉や笹沢美明ら俳人詩人が蕉風に赴いたあたりは既に紹介すみだが、皆、わび・さびの止まり木に固定されて、生きた地点に到達することは難しかつた。こんな自在な「ぱち」には出会わなかつたような気がする。

連句一巻をひもときながら、ぼくは時にそんな接続法に溢れた庭園を巡遊し、たゆたう樂しみの中に溺れている自分に気づき、我に帰つてハツとする。

●詩人は、どんな座を持つたろうか。詩人の座の風景を、お嬢さんの栄子さんが伝えてくれた。暫くはそれを聞くことにしよう。

赤松の大きな森の中の一軒家だった。分水

莊は甲州街道の葛木宿の本陣だった家をWさんが別荘として、天竜川と富士川の分水嶺になっている分水尾根に移築した古びた品格のそなわつた大きな、かつての本陣らしい立派な建物であつた。

『アルプ』一九六号特集・尾崎喜八の中で高橋達郎さんは、詩人流寓の家をこう語る。樹齢百年の赤松の森にあつて、近くに八ヶ岳、南アルプスの甲斐駒や仙丈、前衛の釜無山や入笠山がすぐ目の前に、そして遙か、北アルプスの穗高や槍が眺められた、という。

●詩人にとつて又とない、かつこうの家――“穂屋野歌仙”的ほんどが、この家で生まれたのだった。

●連句一巻を巡遊庭園に例えた人がいる。

優しさや美しさ、あるいは激しさ、勁さ、また軽み――凡そ言葉というものの織りなす魅力が到るところゆるやかに張りめぐらされた庭園。風景の唱和ばかりではない。ドラマ

あり、小説あり、隣り合う二句が自在に作り上げる風景、次々と移り變るものを使しむが、一度として同じ光に出合わさない、不思議な庭園。

連句一巻をひもときながら、ぼくは時にそんな接続法に溢れた庭園を巡遊し、たゆたう樂しみの中に溺れている自分に気づき、我に帰つてハツとする。

●詩人は、どんな座を持つたろうか。詩人の座の風景を、お嬢さんの栄子さんが伝えてくれた。暫くはそれを聞くことにしよう。

戦後の昭和二十二～六年頃のあの不自

由な殺風景な時期に冬に閉じこめられる富士見で、一里近くも歩いて見えては連衆一同長考苦吟しました事、思えば楽しい一ときでございました。それぞれ各人が今後の生き方を模索している、内心は不安な頃でございました……。

● 東京や日立あたりからの遠来の客。詩人ここにありと知つて地元の、志ある人たちが集つて來た。

——後に霧が峰のヒュッテジャヴェルの主となつた当時製材をしていた方や製材を手伝つていた方、富士見駅前の呉服屋さん、富士見高原療養所に入院していた方、それにその山荘の持主でお殿様と言つてゐた方等で、それこそ皆連句等ははじめてと言つたばかりでございました。私等今見るのも恥しい出来で、皆さんに出す食事の仕度をしているとホラお前の番だよと言はれて筆を握り、うんうん言つた覚えがござります。

● このあたり、指導者さえ一人しつかりしていれば「人は皆芸術家」ヨゼフ・ボイスだ。

● —長考したあげくにひねり出した句をほんの一寸注意して直してくれる。それでもう立派に前の句を受け、後につなげて行くものになつてしましました。そして少し日を置いて自分の句を眺めてみると、直された事も忘れて我ながらこれはなかなかいいと思つたのは、私ばかりではなかつたでしょ。

(東京義仲寺連句会代表)

（俳句未来同人）平成十年六・八・十月より転載

● かくして巻かれた幾巻かの歌仙は、これまで語つて來たように、佳什に溢れ、仲々いい。行人の恋の句だけを拾つても、「粧はずして鄙に稀なる」（氣だて優しく町に炭壳る）「掌中の玉おひ／＼に臺が立ち／＼焦げついてくるせつかちな恋」（氣だて優しく町に炭壳る）

● 「屈託無きが親の心配」……とすつきりしたもののむしろ素直すぎるくらいで、これも詩人の個性のしからしむる所だろう。

● とまれ、『穂屋野歌仙』は、こうして東京・中野の三階屋根裏の自称俳諧師の手で野に復活することになった。

● ちなみに尾崎喜八直筆の歌仙ほかは、平成六年、遺族の手で、信州・富士見町立『高原のミュージアム』に寄贈されている。

● 稿終えて、突然大事を書き落したこと気に付いた。これも又、栄子さんのお手紙に譲ろう。引用ばかりで、又ごめんなさい栄子さん。

——東京下町の風俗、風情が時々顔をのぞかせて。……自然の事に対してもお手のものでしようが、ある向きからは、西欧かぶれをした詩人のようにも言はれてきた父の中には、下町に育つた青年時代がしつかり根をおろしている——そんな事がうかがわれる時は巻いた歌仙を見るのが一番ではないかと思つたこともございました。

● 即、歌仙の持つ不可思議な力といえようか。

東京から来られた尾崎先生と坂本波之さんは、常磐線関本駅（現、大津港駅）で落合い、線路沿いの路を北進すると、間もなく山路にかかり、一時間たらずで関跡の峠に登り

思い出の連句

小松崎爽青（かびれ 主宰）

尾崎喜八先生と同座して、歌仙を巻いたのは、昭和十八年の暮春、高萩海岸の玫瑰が咲きはじめた頃だった。五十年の余も昔のこと、記憶は確かにないが、脚達者の尾崎先生のお供をして、坂本波之さんと、脚弱な師匠の大竹孤悠先生を労りながら、戦争のことなど忘れての、勿来の関跡へのハイキングだった。

この年の四月初め、東京の渋谷にあった産報道場で、産業人俳句大会が催され、講師は、詩人の尾崎喜八・小説家で俳句も詠まれた久米正雄（三汀）・俳人の水原秋桜子・富安風生・大竹孤悠の諸先生で、田舎者で世間知らずの私は、孤悠先生の馴持よろしく、大先生のおられる中に交つて、のほほんとして居たことが思い出される。

その時、尾崎先生が、高萩山中の檜柏の自生地を見たいし、勿来関跡も訪ねたいということで、私は先生のお供をすることを約束したのだった。それが実現しての今回のハイキングだったのです。

着いた。現在は立派な資料館兼休憩所が建つているが、当時は古関跡の碑と、小さな祠があつただけの、好事家か俳人の吟行でもなければ、訪ねるような處ではなかつた。関跡で寸事休憩すると、逆落しの山道をここぞらの浜へ降り、そこから平潟港へ出て、海岸沿いに五浦へ来て、岡倉天心の日本美術院の跡（建物は今も存在し、茨城大学美術研究所になつてゐる）や、天心が思索し瞑想したという六角堂を廻り、天心の墳に詣り、大津港へ出て、関本駅から汽車に乗り、高萩駅で下車、尾崎先生の目的の一つであつた檜柏の自生地を探ろうと、土地の人にその場所を尋ねたが、誰もが知らないとそつてない答えに、やむなく海岸の玫瑰の自生地を歩き、咲き初めた花に心を和ませ、海沿いの道を南へ向い、夕景に豊浦海岸に辿り着き、昔の名残りを止めた旅宿に泊つた。

その晩、徒然なるままに連句を巻こうと言つことになつて、歌仙にとりくんだのだつたが、私が二十歳代で世間のことなど一向にわきまえないので、御三方は世の中の酸いも甘いも知り尽した大人で、樂々と付けてゆくのに、青二才の私は前句の意味が解せず、情趣が感じとれないで、付句が浮ぶはずではなく、前句の情調を汲みとろうと頭をひねつても、徒に時間がたつばかり、先生方からは「遅い遅い」と急立てられる。進退極まつて、ままよ風まかせと無茶苦茶に、自分でもわけがわからぬような付を出したら、「おお良く付いた」などと、まことしやかに褒められたりし

て、深更までかかつて半歌仙を巻き、あとは明日にしようと就寝した。その後、連句は何十巻と巻いたが、この時ほど苦しい歌仙の座に連つたことはなかつた。

海辺の朝は早い。暁光が窓に流れ、目覚めると、気分はすつきり、昨夜の苦吟などすつかり忘れて、潮風に頭がはつきりする。朝食を済ませると、歩きながら残りを巻くのだと意気込んで宿を発つた。川尻駅まで三キロ弱、「一巻を巻きあげなければ汽車へは乗らない」と、大人たちは張り切つてきついことを言う。青田を渡る風に心気も清々しく、田圃道を雜草の花々を楽しみつつ、のたりのたりと、昨日の歩き疲れも忘れて、冗談に寛ぎ、歩きながらの付合で、川尻駅までに何とか一巻を巻き上げた。それが行人先生の発句（阿武隈は山みなおなじ春の雲）で巻きはじめ、孤悠先生の挙句（霞の奥に霞むみちのく）と、首尾よく巻きあがつた。

尾崎先生と二度目に歌仙を巻いたのは、戦後の混亂期の最中の昭和二十四年十二月十九日、尾崎先生が孤悠庵を訪ねられた時であつた。尾崎先生を日立の街を案内するとして、「銀座通り」と称した商店街を歩き、お茶を飲もうと入つた喫茶店で、連句をとうことになり、巻き始まつた歌仙は、行人先生の「人はみな師走日立の太煙」であつた。

発句の「太煙」は、日立の象徴と言われ、街の西北に聳えていた、日立鉱山精錬所の大煙突の、四六時中吐いていたその煙のことで、この時も半歌仙を喫茶店で巻き、孤悠庵に戻

つてから残り半歌仙を巻き上げたのであつた。

この時は「春雲の巻」の時から七年の歳月を経ていたし、私も兵隊に行って人に揉まれて、いささか大人になつていたから、あたふたとすることもなく、両先生に伍して連句を楽しんだように記憶している。

注 文中の「春雲の巻」「日立の巻」は本誌18・19頁を参照

種子蒔俳句会と

尾崎先生

小林わたる

昭和25年3月、長野県諏訪郡富士見村（現在富士見町）には種子蒔句会という俳句会が発足した。この会の命名者は尾崎喜八先生であつた。

私の父小林桂雪の当時の句帳から一部を引用すると、

昭和25・3・25 尾崎行人先生宅句会。参會者、燕城・行人・白樺・山小屋・桂雪

句座樂し春雪玻璃に來てあたる 桂雪
樺林の照りかぎろひに雪の舞ふ

昭和25・4・23 第2回種蒔会。参會者、燕城・行人・山小屋・烟浪・彩壺・桂雪・白樺

メモ帳をおさへし桝や種を蒔く 桂雪
種蒔くや身振り手振りを教へつ、

第3回記載欠（桂雪は田植で忙しく欠席したものと思われる）。

昭和25・6・17 第4回種蒔会。於白林莊

(参会者は以下略す)

昭和25・7・16 第5回種蒔句会
昭和25・9・17 第6回種蒔句会
昭和25・11・14 句友山小屋、電気事故にて急逝

冬の灯の今宵あかるきことにさへ 桂雪

昭和25・11・19 第7回種蒔句会

昭和26・1・14 第8回種蒔句会 於烟浪居

昭和26・2・18 第9回種蒔句会 於白樺庵

昭和26・3・18 第10回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・4・29 第11回種蒔句会 於白林莊

昭和26・5・20 第12回種蒔句会 於白林莊

昭和26・6・17 第13回種蒔句会 於武智温泉

昭和26・8・15 第14回種蒔句会 於白林莊

昭和26・9・20 第15回種蒔句会 於水荘

昭和26・10・17 第16回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・11・14 第17回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・12・18 第18回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・1・14 第19回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・2・18 第20回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・3・18 第21回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・4・29 第22回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・5・20 第23回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・6・17 第24回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・7・14 第25回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・8・18 第26回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・9・22 第27回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・10・26 第28回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・11・23 第29回種蒔句会 於桂雪居

昭和26・12・27 第30回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・1・31 第31回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・2・13 第32回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・3・12 第33回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・4・15 第34回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・5・18 第35回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・6・11 第36回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・7・15 第37回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・8・18 第38回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・9・22 第39回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・10・26 第40回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・11・23 第41回種蒔句会 於桂雪居

昭和27・12・27 第42回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・1・31 第43回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・2・13 第44回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・3・12 第45回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・4・15 第46回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・5・18 第47回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・6・11 第48回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・7・15 第49回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・8・18 第50回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・9・22 第51回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・10・26 第52回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・11・23 第53回種蒔句会 於桂雪居

昭和28・12・27 第54回種蒔句会 於桂雪居

ゑ、小林こがね、飯島恒夫、小林わたる、増沢久子、川上久子、西野五郎、堀内、むつを、一湖、志外夫、忠良、善人、たつ、名取桃蔭。年齢層は20歳から68歳、先生は59歳であった。

種子蒔会は当地に前々からあり、途中から発足はいつか

富士見、諏訪の者に加え、當時、縁あって富士見に勤めた者、滞在していた者が、それぞれの所属結社を越えて、先生の囲みに集つたのであつた。この中には、一誌の主宰者、俳人協会評議員、会員、夏草・山火・夏炉・馬酔木・万緑の同人、会員等、現在俳壇で活躍している人々が目立ち、この種子蒔句会の性格の一端をうかがい知ることができる。参加者の内には地方俳句の指導者(立机を許された宗匠)であつた人も、當時各俳誌の同人、会員でもあり盛んに作品活動をしていた若手とは句風が幾分違つてゐた人々も、種子蒔会に集い尾崎先生のご指導を共に仰いでいる事は特筆されてよいと思う。

尾崎先生が参加されたというような誤解を生じる印刷物がある。一つは『高原の自然と文化』誌4号小林互「種子蒔俳句会と尾崎先生」で、第10回種子蒔会以後の句会について書かれていること、二つ目は『雨水』(小林白樺句集)の後記及び『高原の自然と文化』誌4号「晒菜升麻」に「桂雪さん、つやゑさん等と種子蒔会を設け、燕城先生のご指導をうけた。その頃詩人の尾崎喜八先生も富士見に仮住して居られたので先生のご指導もあおぎ……」とある事である。一方は言葉不足の為、一方は記憶違いであろう。

冒頭に述べたように桂雪の句帳により、昭和25年の3月分水荘でひらかれた句会ではまだ句会名が記されてなく、4月の例会で初めて句会名が記され、しかもこの日の題が種蒔であった事から4月23日に命名され、さかのぼつて前月の「尾崎行人先生宅句会」を初回としたことが分かる。したがつて発足は昭和25年3月25日、場所は尾崎先生居(分水荘)、「種子蒔会がいいですよ、それにしましよう」と先生がおっしゃったと私は聞いてきた。

当時は富士見村及びその周辺にも多くの俳句の集まりがあつた事が桂雪句帳にこまごまと記されているが(昭和14年頃のものから)、また先生ご帰京後の巻には色々の名称の句会名が多出するが、その中で「種子蒔会」は白樺

残されている巻(句会記録)に出句と選句、白樺、桂雪、わたるが代るがわる表紙の句会名を書いている)等では「種蒔」「種子蒔」が混用されているが「種子蒔」とした方がよい。尾崎先生の葉書(昭和27・3・12桂雪宛)に「さて久々の種子蒔句会、実は私も待ちわびてをりました……」とあることによる。

季題としては「種蒔」でまず粋蒔を考えるが、「種子蒔」の方は蔬菜、他の穀物、草花の種子にまで連想が広がり、広範囲から参加した「御連衆」(尾崎先生の書中にあつた言葉)のことを考えてもその方がふさわしいと思わ

や桂雪を中心とする神戸の句会になつていつたと言える。

「行人」は尾崎先生の俳号であつた。先生の俳句は、特に、富士見滯在中のものは、ほとんど世に発表されておらず、貴重な資料であるので、種子詩句会出句のものを中心として抄出したい。

山あひに甲斐の雲見ゆ鳥頭
啓蟄といへども信濃雪暗く

行人

甲斐、信濃、八ヶ岳、蓼科、甲斐駒、野辺山などの固有名詞を積極的にうたい込んだ作品が目立つ。これらは、すべて、実際に踏んだ山であり、知悉している土地である。山の名をいふかわりに「おじいちゃんの山」、「おかあさんの山」、「美砂子の山」等と呼んで、幼い孫娘に見える限りの山を教えたりした。

日雀女や春の山伐る音悲し
もすの巣を隠して棠梨の花たはは
鳥頭更級升麻どつと活け

行人

動植物への造詣の深さについては別に書かれる方があると思うので、特には触れない。ある時、「名もない花」ということを口にした人があつた。これに対して、先生は、「どんな小さい地味な草でも、すべて、好もしい名前がつけられている。一本一草に、もつと、愛情深く接するように。」と教えられた。別の時、「わたしは博物学者になるところを

まちがえて詩人になつてしまつた。」とも言われた。

田打笠緒の紅なるが向ふむき
表札のこの名に記憶權垣
種袋絵が美しと妻は捨てず

行人

人をよんだ作品にもよいものがあつた。

「私の生きる目的は……」幼い孫娘を膝に先生は話し出された。「美砂子が一人前の女性になれるようにお手伝いすることです。それも、信州の女の人のよさや美しさをもつた女性にです。目的のもう一つは……」と言つて先生は語を強められた。「植物のことや、動物のことや、それらを通して、多ぜいの人たちと仲良しになることです。」

神戸の穂屋祭のことであつた。田舎の祭の招待にも快く出向いてくれたのであつた。

風船は誰が手放れし秋祭
秋雨となるさへ祭果つるさへ

行人

この句はこの日の作であつた。

如月や苔をやしなふ霧小雨
濡紙にゑがける如き春の雷
邯鄲やしらじら風の八ヶ岳

行人

て、すばらしい句だと思う。第二句は還暦祝賀句会の折のご出句。この時先生は第二位の互選成績であった。第三句は、昭和28年9月20日、富士見村公民館で行われた句会に出句されたもの。当日、この句は、彩壇、雅広、白樺の選に入っている。

他に次のようなご出句があつた。

羽重く春のいづこへ天道虫
滴るや一羽の蝶の行き返り
彼岸寺斑雪の八嶽を木の間かな
牛小屋をよぎる初蝶絢爛と
花しどみ流離といへど天地かな

花
天皇誕生日

花あんず佳節の雨にうちけぶり
大瑠璃のしばし鳴きやみ崖若葉
路きけば翁はつんば花李
朴の花晴れて暮春の山暗し
郭公よ八岳晴れあやめ咲きてけり
白樺を青葉の森に剥ぐ乙女
甲斐駒の黑白を前に剪定す
秋立つやマチス画集に蔵書印
この原や風露草うつ霧の粒
野辺山の花野の雨や開墾す

行人

秋暑し大湯とざせる休電日
湖の秋しきりに鳶の水を搏つ
漕ぎ出でて日傘ひろげし湖上かな
松虫草の路の果てなる夕浅間
ふくべ棚小使室にラヂオあり
いつの間に大きな春の雲となりし

種子詩句会は、常に、互選句会の形をとつた。第一句は第五回句会の時の出句。当日、この句は誰にも選ばれなかつたが、今になつ

春寒き出土の壺に模様ある
残雪がつるぎの如くある林

ひこばえの振木の赤や雪の果

蓼科の遠傾ける雪間かな

日にとざす別荘の数懸巣鳴く
鳥頭切屑のごと散れるかな

尾崎喜八(行人)と俳句

嘉納忠明

解説

詩人、尾崎喜八が詩作の他に、俳句を作っていたことは余り知られていない。

それは全一〇巻の『尾崎喜八詩文集』の中に、わずかに五〇句が、「よみがえった句」(詩文集・7)に併録されているに過ぎず、自筆の「略年譜」(詩文集・3)でも句作には触れていないこと等によるであろう。

そこで未収録作品や関連記録を「尾崎喜八(行人)と俳句 資料一覧」として収録した。

尾崎に、「未消ゆるこころの波」(詩文集・7)という俳句に寄せた回想がある。筆者はこの回想を基軸に、資料で補充して、尾崎と俳句の関わりを集約したい。資料群は、戦前井荻時代後半から戦後の富士見移住時代にまたがって集中している。そこで、大きく二つに分けて考える。

先生をお送りした後、第二次句会が持たれている。

バスいたく遅る夜の秋の雨 桂雪
秋雨の闇に残りし声のみぞ 白樺

(『山火』同人、俳人協会会員)

種子蒔句会で行人が詠んだ句は前出の「行人俳句・連句」の項に繰り入れられている。

(編集部)

昭和一八年には、句誌「かびれ」(主宰・大竹孤悠)の六月号に、大竹孤悠、坂本波之、小松崎爽青らと勿来・豊浦に吟行した折の、連句「春雲の巻」と吟行作品二句が、掲載されている。これらは最も古い記録であるから、尾崎の記述に当る。そして、戦前の作品としてこれだけが残っている。

「かびれ」との交流は、尾崎が「戦争中友達の詩人を介して大竹孤悠氏を知った」ことから始まつた。友達の詩人とは坂本七郎・波之である。坂本波之は、尾崎の俳句の面で最も深く関わった人なので少し触れておきたい。波之は、群馬県太田町で明治三九年に生まれ、大正一二年に上京、築地工手学校に通っている(『麦明・回想波之』略年譜)。

その後、本名で詩を「太平洋詩人」「学校詩集」に寄稿、「銅鑼」「手旗」に参加、自身、「第弐」を編輯・発行する。昭和二年から四年のことと、これらの同人誌等を通して互に知つたのであろう。

昭和七年に、中島飛行機に転職し、東京に戻つて後、昭和八年に、詩作から「俳句に傾斜」(前掲)し、「かびれ」の誌友となり、昭和一〇年に、号を銀箒から波之に改め、昭和一二年に井高富美と結婚、荻窪に住むことにいた。

一方、尾崎はこの間、京橋区新川から郊外の荻窪、井荻にと移り、「旅と滞在」『山の絵本』『雲と草原』へと、自然詩人の趣きを深めている。

昭和一七年八月に、坂本波之は第一句集『秋濤』を私家版で上梓した。これには題簽

を高村光太郎が書き、芹沢鉢介が装釘、そして尾崎が「序」文を書いている。尾崎はその中で、波之が俳句を作っていたことを知り、自然との照應や句境の上達に感心している。

おそらく、これが機縁となり、波之が大竹孤悠に尾崎を紹介したのであろう。そして、それまで私的な機会にとどまっていた尾崎の俳句との付き合いが、表立つて表われることになった。

その一つに、先述した孤悠らとの勿来・豊

浦吟行があり、作品の発表がある。

昭和一八年四月二九日に、産業報国会の産業人俳句大会で講演し、次いで、産業報国会俳句部の東京秋季錬成競詠会の審査員をしている。

産業報国会の講演について触れておきたい。

この大会は、中島飛行機に勤めている坂本波之らによって企画されている。講師と題名は、久米正雄||二階堂俳話、富安風生||梅若葉競詠選、水原秋桜子||俳句隨想、尾崎喜八は「季感と博物学」を話した。

尾崎のこの講演について大竹孤悠は、後に次のような感想を述べている。尾崎は、芭蕉の二つの五月雨——最上川と大井川——の句を探り上げ、その比較、解釈する際、「該博な科学知識を土台とする明達な分析的解説の妥当さは、俳壇に曾つて例を見ない」(決戦と俳句作家の在りやう(3))と。技術者たちがかなりいると思われる聴衆は、おそらく認識を新たに共感したに違いない。

このような外の活動とは別に、先に私的な

機会といった、親しい者との句作について述べる。坂本波之の句集の序文を書く以前からである。昭和一三年に『雲と草原』が出る。尾崎栄子氏によれば、尾崎は夫人への献辞として俳句を新著に認めていた。

串田孫一氏は、井荻に訪問したとき、先客の高須茂や勝見勝らと俳句を作らされて困った、と「尾崎さんの山歩き」に書いている。

井荻の尾崎をよく訪問し、文学的交流の厚かつた人に、山崎栄治、川崎精雄(斗城)氏がいる。両氏の回想に、尾崎と俳句の話をしたことには出でこない。思うに尾崎は、相手の話や得意分野に話題を選んだのであろうか。

尾崎の作品を愛読し、山の講演を聞いて近くになつた人達に、蛭田憲一郎氏がいる。

蛭田氏は昭和一〇年に、東京の中島飛行機に就職し、山岳部に入つて、その探鳥会の講師に中西悟堂が来ていて、近所に住む尾崎を紹介したのである。蛭田氏は尾崎を訪問する際、いつも山仲間の大部俊郎氏と一緒にあつたが、おそらく昭和一五年の終わりから一六年のことであろうか。

両氏は山歩きばかりでなく、一緒に俳句を作っている。大部氏の回想に、「先生の俳号を

「行人」から直ぐに思いつくのは、昭和一五年一二月に刊行された、詩集『行人の歌』の書名である。そして「後記」の中に、「行人」の文字がある。尾崎は詩集の名に、別の詩華集に使つた「昨日の歌」を探りたかつた、という。そして「今日まで歌ふことを知つて居た『行人』(傍点筆者)は、恐らく明日もなほ歌ふことが出来るだらう」と述べる。「行人」は昨日から明日、追憶から憧れの接点で、今日の生を確かめる。「行人」を辞書にある「旅をしている人」の謂とみるならば、詩集『旅と滞在』(昭8)の詩想に通じる。

その『旅と滞在』の早い時期に、「行人」の使用例がある。昭和三年六月号の詩誌「東方」(尾崎喜八・編輯、発行)に、尾崎は、フランスのマルセル・マルチネから片山敏彦、上田秋夫、尾崎の三人宛に贈られた未発表の原稿のうちから、詩「春のイマアジュ」を訳載した(『尾崎喜八資料』10号)。そのマルチネの詩集の原題は、"Les Chants du Passager. 1934"で、尾崎はそれを「行人の歌」と訳している(後に片山敏彦が訳したものでは「過ぎ行く者の歌」となつている)。「行人」と号された(「訪わざる者の記」と出でている)「旅をしている人」「過ぎ行く者」は、一連の同意語である。尾崎は、ヘルマン・ヘッセで、「行人」の俳号を使つてゐるから、それ以降の「早春の雨の夜(一九三八)」(『詩文集・5』)の中で、「私が詩人であるということは、

尾崎が句作をした時代を知る資料として重要なである。

尾崎は、俳号に「行人」を選んだ所以を明

らかにしていない。

私が自分自身の歌のなかにこの世の過ぎゆく美を呼びとめて、それを私のものとして顕現することに一心を傾けるということだ」といっている。この「詩人」の心と「行人」の姿とは互に照應している。たどい詠詩から触発されたかもしれない「行人」の、その心象は、尾崎の詩心深く、長年に亘って熟成したものである。「行人」をこのようにとらえると、語感に硬質の寂しさを覚えるものの、詩人尾崎喜八を象徴するにふさわしい俳号と思われる。

坂本波之と蛭田憲一郎（石尊）氏のことをもう少し述べたい。

蛭田氏と波之とは、尾崎が加わる以前から知り合いであった。中島飛行機の社員親睦会（航友会）の機關誌の俳句欄に、蛭田氏は投稿し、波之が指導に当っていたのである。昭和一八年六月二九日の尾崎の手紙によれば、尾崎と波之に蛭田氏を加え、通信による連句「夏木立」を始めている。それは波之の提案であったが、当初の意気込みも空しく、完結しなかった。蛭田氏は、この折の葉書連句が戦後の「行人会」になつた、という。行人会については後で触ることにする。

波之に宛てた七月五日の手紙に、「夏木立」が佳境を迎えたと書いた後、「西南太平洋方面いよいよ苛烈の決戦相続ぎ半夜目をさまして沈痛の思いに眠られぬ時もしばしば」と、外には表わせない苦衷を洩らしている。

そして、八月三日には、「夏木立」に触れてから、前々から考えていた「野外雑記を今年こそコツコツと書き溜め」、「人に見てもらふ

といふよりも寧ろ自分生涯の記念にしたい」と書いている。

翌年、昭和一九年一月一日から二月一五日にかけて、身近な自然を対象にした観察記録

「井荻日記」（『詩文集・5』）を残している。それは専ら観察に傾注し、「野外雑記」の意図を果たしている。

ところで、先の尾崎の手紙の言葉に、どこか思いつめた印象を受ける。実際、句作の面影も見えなくなる。

以上、戦前ににおける尾崎と俳句との関わりを、とりわけ昭和一五年から一八年、井荻時代後半を主に述べてきた。これまでのところ、尾崎自身の発言が乏しいことから、句作の契機や意図が不明のままで、結局、句作の意義や収穫を明確に示すことはできなかった。

とはいっても、詩の一形式である句作の雅号に、「行人」を選んだことは、尾崎の詩心形成を考える上で意義深い。そして、未だ際立った句作を示さなかつたが、句誌「かびれ」を知り、旧友坂本波之との交流を新たに深めたことは、次の富士見時代における尾崎の復活に少なからぬ役割を果たすことになる。

(2) 富士見時代（昭21夏～27秋）

昭和二〇年五月に、尾崎は井荻から青山に移った所で罹災し、府下砂川、千葉県三里塚、市内杉並と転居を重ね、昭和二一年の夏に、娘栄子が夫の療養を兼ねて移住していた長野県富士見によつやく落着くことができた。

当時の尾崎の胸中や心境は、「略年譜」（『詩文集・3』）や「到着」「恢復期」（『詩文集・

6』）などに書かれている。ここでは、井荻時代後半にも増して顕著になる、俳句との関わりを述べていきたいた。

戦後間もない頃、尾崎は「かびれ」の大竹

孤愁に宛てた手紙（発信地、日付不明）に、「未来を貰くもの」より）から、坂本波之、蛭田石尊にも孤愁に対すると同様に、新しい人生を踏み出したいといふ念願（小松崎爽青）と寂しさに徹して、そのぎりぎりの奥底から

沈黙している、と書いている。

昭和二一年六月二三日（杉並、井上康文方）、三重県の波之に宛て、「孤愁先生の葉書遠山村より廻送」、「小生新生のため、『浅春』一巻」を興すことになったことに謝意を述べている。遠山村には岳父水野葉舟が住む三里塚があり、尾崎が一時寄寓していた。

この二通の手紙で波之、孤愁、行人による連句「浅春」を始めたことがわかる。そして、尾崎の痛切な告白に接した孤愁からの便りは、尾崎の孤独の詩心を揺すぶつた、と思われる。

八月三日の富士見から波之に宛てた葉書は、連句「浅春」に付けた後、「小生到頭都落ちハケ岳裾野の孤立家屋に当分（二、三年）住む予定、寂しいが山々の大観見事です」、「訪ひ来る人とて無く」、「おたより願上げます」と書き寄こしている。尚、「浅春の巻」の残つてている分も、次に書きとめておく。

浅春の巻

春浅き遠山村は如何ならん

雉子の羽音が明け白む窓

波之
孤愁

草びらや去年の炭籠あと崩えて

行人

剣は鋤に新墾の土

之

月今宵五升炊ぎをもてあまし

悠

五年ぶりかよ踊る磯浜

人

「波之さんの選とあらばのがすことではあります」といふ、富士見での句作に意欲を見せ、実際一月号には、「信濃住み」が掲載される。こうして秋から冬の句を続けて寄稿した。

句作に熱を帯びてくると、かつて行人、波之、石尊ら親しい者達と巻いた連句を富士見でも始めたのである。皮切りは、二二年の正月に、分水荘の主渡辺昭（阿きら）氏、栄子（叢子）氏の三人で、その後、栄子氏の夫石黒光三（桃里）氏、土地の中山政市（四運一）氏、高橋達郎（立路）氏、白崎俊次（春茨）氏、それに伊藤海彦氏、吉村博次氏らが加わって巻くようになる。

昭和二二年一二月一四日の実子夫人が波之に宛てた手紙には、「富士見生活は思はぬ幸福そのものやうなもの」になり、富士見で二人、上諏訪で二家庭の友人を得、村の青年団、小中女学校の先生、若いよい人らを沢山知つた。あちこちと講演、幸によく理解され、どこの句を詠んで知らせる者もいた（「音楽会」『詩文集・6』）。

昭和二三年三月に『高原暦日』、六月に『美しき視野』を上梓、富士見生活の最初の収穫となる。

土地のいろんなとの知識が広がる一方で、グループによる交流が新たに生まれた。

早いところで、高原療養所の入院患者達があつた。その内の朝比奈菊雄氏（杜美王）がい、俳句に無縁ではなかつた——が、入院して間もない二三年七月末に尾崎を訪ねてから、朝比奈氏に同行する入院患者が出てきて、分水荘で句会を催すようになった。忘れてならないことは、尾崎は彼等に自作の詩や俳句の持参を求めた。定連に、後の「穂屋野会」になる朝比奈菊雄（蕗子）、加藤末彦（艸人）、川上（山口）久子、西野五郎、小林義郎（蟻樓、蟻郎）氏らがいた。

療養所の人達との交流は、訪問者にとどまらず、院内の俳句会を応援する。会誌「白樺」の投句選評、自作の句や詩の寄稿、講演にと、正木不如丘とともに力をかしている。尾崎の白樺句会との関わりが、いつから始まつたかは明らかでない。が、朝比奈氏の尾崎訪問の深まりとともに実現したのだろう。昭和二六年三月に、「夏炉」の木村蕪城と替るまで選者を続けた。余談になるが、先の蕗子、艸人、久子、五郎、蟻郎らは自分達の「白樺」とは別に、山口青邨や木村蕪城らが関わっている「夏炉」にも積極的に投句している。小林義郎氏によれば、分水荘では朝比奈、加藤氏がいた二五年頃は、句会と吟行が盛んであった（「詩人の休日」）、という。

昭和二五年三月に、桂雪、白樺に木村

蕪城、阿部山小屋をはじめて、分水荘で句会を行なつた。句会は一回で終わらず、第二回

の折、尾崎の言で「種子蒔（俳句）会」と命名され（「種子蒔俳句会と尾崎先生」）、継続する。

この俳句会の特徴は、互選形式で選者をお

かず、会員も多様であった。会に流派にとらわれない自由があったのか、「ホトトギス」「馬醉木」「夏炉」「山火」の人達が参加している。尾崎の回想に出てくる信濃の人達、彩壺（伊東・馬醉木）、燕覆子（高崎・馬醉木）、桂雪（小林・山火）、白樺（小林・夏炉）そして木村蕪城（ホトトギス、夏炉）らは、種子蒔

俳句会に参加している。かつて産業人俳句大会で、大竹孤悠を感嘆させた尾崎の博物学的蘊蓄は、おそらくここでも、句作熱心な彼らの詩囊を刺戟したに違いない。そして、昭和二七年三月に油屋で、尾崎の還暦祝賀句会を開いたり、尾崎が帰京後、富士見再訪の折など歓送句会を催し、懇ろな俳句の交流をもつたのである。

種子蒔俳句会が出来た昭和二五年頃の尾崎は、講演や探鳥会に、詩誌「つめくさ」の応援や日本山岳会信濃支部の活動等、実際に驚くばかりの行動であった。

そんな中で、松目集落の地域ぐるみの生活に根差した交流がある。

当時、松目では若い人が原動力となり、戦後の生活改善に取組んでいた。そこで村民の協調と融和を図るために、皆が楽しめる俳句の小林桂雪、小林白樺らのグループを知った。

会が採り上げられた。敗戦後、満蒙開拓団の人達が引揚げてきた時、この地域の一団は、短歌や俳句を作つて互いに励まし合い、犠牲者は奇蹟的に少なく帰国した、というエピソードをもつ土地（『富士見高原　その詩その小説そして』）であった。

昭和二五年の冬に、尾崎は小林惠風とともに、選者を依頼された。外国生活の経験者が、今は新しい視野の持主が望ましいと分水荘にいる尾崎を推薦した、という。若い人達は尾崎を青年団活動を通じ、以前から知っていた。その一方で、老人達に馴染まれてきた作風を無視しなかつた。尾崎は彼等の熱意と知恵にほだされたことだろう。

昭和二六年の、生活改善優良モデル町村に松目地域は県から表彰され、翌二七年には、信毎農業技術賞特選になつた。受賞の際の記事は、共に、村民の協同精神を讃え、俳句会の役割を紹介している。町田梓楼は、信毎農業技術賞に寄せた隨想の中で、松目の受賞における尾崎の協力とその意義に触れている。因みに、町田梓楼は、大正一五年に来日したヴィルドラックが、慶應義塾大学で講演した際、通訳をしたから、尾崎とは識らぬ仲ではなかつた。当時二十五歳の農業実行組合長であつた河角巖氏から、特選候補地とは投資や規模の大きさから叶わず、アイデアで対抗しよう、と尾崎をまじえ方策を練つた、と聞いた。俳句会は盛会であった。尾崎の昭和二七年の日記に、選をして連板三枚、短冊五三枚書いてくれ、と使いが置いていった、とある。

かくして松目との交流は、尾崎の特性が最も総合的に、人間性を含めて表われた、といえる。

尾崎は、東京郊外の高井戸で半農半文学の新婚生活を始め、以来、生活と芸術の融合を念願し、その結晶が尾崎独自の詩・文学になつた。松目の人達との交流は、それが姿形を変えて表われ出たことであろう。

さて富士見時代での尾崎と俳句との関わりを述べきたが、これまで殆ど他者との交流の面をみていた。ここで尾崎自身の内面と

敗戦後、尾崎の文学的再生を連句で呼びかけたのは、「かびれ」の大竹孤悠と坂本波之であつたことは頭初に述べた。尾崎はその心に応えて、富士見に落着いてから句作を再び始めて、「かびれ」に寄稿するようになる。

昭和二四年八月号に発表した「旦暮孤吟」に、「花しどみ流離といへど天地かな」という句がある。尾崎はこの句に寄せて、小松崎爽青への手紙の中で、「私の晩年は此のやうにして『流離』によつていよいよ豊かに照らされてゐる」と述べる。富士見に来て三年の歳月を重ねた詩境が、この一句に凝縮する。

尾崎は「旦暮孤吟」の後、「夏霞の巻」「独立の巻」を巻いてから句作を「かびれ」に発表しなくなつた。昭和二五年一〇月に、波之に宛て、「小生中々句作の気持になれず、やつぱり詩だの散文だのに芸術的ハケ口を見出している」と書いている。

又、村人との会話（「蝶を護る」）の中で、

かくして松目との交流は、尾崎の特性が最も総合的に、人間性を含めて表われた、といえる。

尾崎は、東京郊外の高井戸で半農半文学の新婚生活を始め、以来、生活と芸術の融合を念願し、その結晶が尾崎独自の詩・文学になつた。松目の人達との交流は、それが姿形を変えて表われ出たことであろう。

さて富士見時代での尾崎と俳句との関わりを述べきたが、これまで殆ど他者との交流の面をみていた。ここで尾崎自身の内面と

敗戦後、尾崎の文学的再生を連句で呼びかけたのは、「かびれ」の大竹孤悠と坂本波之であつたことは頭初に述べた。尾崎はその心に応えて、富士見に落着いてから句作を再び始めて、「かびれ」に寄稿するようになる。

昭和二四年八月号に発表した「旦暮孤吟」に、「花しどみ流離といへど天地かな」という句がある。尾崎はこの句に寄せて、小松崎爽青への手紙の中で、「私の晩年は此のやうにして『流離』によつていよいよ豊かに照らされてゐる」と述べる。富士見に来て三年の歳月を重ねた詩境が、この一句に凝縮する。

尾崎は「旦暮孤吟」の後、「夏霞の巻」「独立の巻」を巻いてから句作を「かびれ」に発表しなくなつた。昭和二五年一〇月に、波之に宛て、「小生中々句作の気持になれず、やつぱり詩だの散文だのに芸術的ハケ口を見出している」と書いている。

しかし一方、「富士見の生活は数十篇の詩と散文とを私にもたらしたが、土地の人々はそういう詩人の私には敬遠して手をつけずに、…俳句に理解や愛を持つ者としての私に一層多く期待をかけたらしいのは、ここでも同

「余技としての俳句を問題にされたたくない」のでやめる、と洩らしている。もとより尾崎にとって、俳句は余技、というは本意ではないことは、帰京後に書いた「未消ゆるころの波」の、句作を断念する経緯からして明らかである。

波之に書いた氣持と、句帖を燃やして断念する思いとの間で共通するところは、詩作を第一義とする者の自己規制であろう。

尾崎は「かびれ」に発表しなくなつたものの全く句作を止めたわけではなかつた。雑誌「俳句」や本「資料」の拾遺句でみると、一方で、土地の句会との交流は、むしろ盛んになつていつたことは前述してきた通りである。

講演会のように一度の出会いと違つて同人誌や俳句会は、友誼は厚くなり、継続するの

は自然であろう。中でも本来の詩業より、俳句会での交流は際立つている。中新田時雨句会のようないくに地域での句会に招かれたりしているが、療養所の白権句会や神戸の種子蒔俳句会、松目の俳句会と、それぞれが特徴のある歓会をもち、尾崎を遇したのである。俳句特有の詩的感興を彼らと共有し、その暖かい交流が尾崎の他郷での再生にとつて大きな力になつた、ともいえるのである。

しかし一方、「富士見の生活は数十篇の詩と散文とを私にもたらしたが、土地の人々はそういう詩人の私には敬遠して手をつけずに、…俳句に理解や愛を持つ者としての私に一層多く期待をかけたらしいのは、ここでも同

じ事だった。そしてたまたま私をうながして近作の詩を読ませながら、溜息をついて彼らは言うのだつた。べどうも詩というやつはむずかしくつて『詩文集・7』といふ尾崎の嘆きを忘れてはならない。

ここで土地の人とは別に、尾崎の帰京後も

濃密な付き合いをもつた「穂屋野会」「行人会」の名を挙げておきたい。共に俳句を媒介として出来たことは、前に触れている。穂屋

野会の人は、分水荘アカデミーと呼ぶほど知的交流を深め、共に異郷で過したのである。

会の名は、昭和二六年秋に、尾崎によつて付けられた。行人会は、戦後落着いてから尾崎行人を囲み、坂本波之、蛭田憲一郎・石尊、蛭田利之・狸得、小宮静雄・桃々子が毎年一

三夜に、夫婦同伴で句会をもつたのである。以上、尾崎と俳句との関わりを辿つてきたが、殆ど俳句を媒介にした交流の紹介に終つた。最も知りたかつた尾崎の句作の心—動機や意義などは明らかに出来なかつた。しかしながら筆者は作品を収集する中で、俳句ならではの表現や詩作とは違つた表情に出会つた。尾崎の文業を考える上で、句作の意義を看過してはならない、と改めて認識した。

終わりに、資料収集にご協力戴いた故坂本富美、蛭田憲一郎、山口久子、名取正人、小林瓦、野本元の各氏に、感謝の言葉を記したい。尚、尾崎の未公開書簡の引用は、ご遺族の許可を戴いている。

資料一覧

「尾崎喜八資料」4号 (88)
松目の俳句『松目句集』(刊行、初出不詳)「尾崎喜八資料」11、12合併号 (96)

勿来・磯原吟行(行人、他)「かびれ」昭18・6

春雲の巻(連句—尾崎行人・大竹孤悠・坂本波之・小松崎爽青)「かびれ」昭18・6

能登吟行「かびれ」昭21・9

信濃住み「かびれ」昭21・11

落葉籠「かびれ」昭22・1

かびれ俳句「かびれ」昭22・1

冬の花抄「かびれ」昭22・4

かびれ俳句「かびれ」昭22・4

日暮孤吟「かびれ」昭24・8

夏霞の巻(歌仙—波之・行人)「かびれ」昭24・10

日立の巻(連句—行人・孤悠・爽青)「かびれ」昭25・4

連句三題(行人・觀子(石黒)「かびれ」昭29・1

花茨「白樺」(白樺句会)昭25・6、7合併号

秋祭「白樺」昭25・9

晩秋小景「白樺」昭25・11

秋花鳥「白樺」昭26・9

高原浅春「俳句」昭27・6

淡烟草舎「俳句」昭28・5

よみがえつた句『尾崎喜八詩文集・7』昭33・12、初出不詳

行人句抄(伊藤海彦編)昭60・2私家本

「旅」昭22・11

俳句・関連著述

秋の隣人『尾崎喜八詩文集・6』初出・秋深き

「旅」昭22・11

尾崎先生御講話「白樺」(白樺句会)昭25・11

虚子俳句鑑賞「俳句」昭27・7
磐梯(水原秋桜子)「俳句」昭27・9

水原秋桜子『薩摩山菊』(書評)「月本読書新聞」昭28・8・24

末消ゆるこころの波『尾崎喜八詩文集・7』初出・同題「馬酔木」昭29・4

祝詞に代えて「私の衆讚歌」昭42、初出・祝詞に代えて「馬酔木」昭39・7

序『秋濤』(坂本波之句集)昭17、私家版

音楽会『尾崎喜八詩文集・6』昭34

季節の短章—晩夏『尾崎喜八詩文集・7』昭33

その土地への愛の序曲『尾崎喜八詩文集・9』昭47

高原の子供の歌『音楽への愛と感謝』昭48

そのおもかげ『清明・回想波之』(坂本波之句集『清明』附録)昭48・9

他氏関連著述

坂本波之 谷川岳(句)「かびれ」昭18・2

〃 上越国境行(句)「かびれ」昭18・2

大竹孤悠 巻頭言「かびれ」昭18・6

〃 決戦と俳句作家の在りやう(三)「かびれ」昭19・4

坂本波之 詩人の四季—『麦刈の月』を読みて

「かびれ」昭21・10

坂本波之、他「かびれ」二〇〇号の思ひ出(座談会)「かびれ」昭23・6

小宅容義「かびれに於ける季感説」「かびれ」昭24・7

肥の香や「かびれ」昭24・8

坂本波之 高原抄（句）「かびれ」昭24・12

立記念誌』昭55・8

立春大吉 「かびれ」昭25・2

木曾雪谷 （句）「かびれ」昭36・5

秋季大会てんまつ記 「かびれ」昭

風雅逍遙（一七・二七） 「かびれ」昭

坂本朱槿 尾崎喜八先生の訃（句）「かびれ」昭

西 畏多 爽青先生と連句 「かびれ」昭60・3

小松崎爽青 未来を貫くもの 「かびれ」昭60・

8（多賀）昭25・4、転載

町田梓樓 農村と協同精神 「信濃毎日新聞」昭

27・7・14（尾崎喜八資料）4

石田波郷 編輯室にて 「馬酔木」昭29・4

小林白樺（投稿句）「句帖焼きしと聞くは淋しや

鳥雲に」 「夏炉」昭29・7

朝比奈菊雄 夏 「アルプ」昭33・7

尾崎実子 私の「富士見日記」から 「尾崎喜八

詩文集」月報3、昭34

串田孫一 尾崎さんの山歩き 「会報」（日本山岳

会）昭49・5（尾崎喜八資料）9

小林義郎 詩人の休日 「アルプ」昭49・6

高橋達郎 富士見高原 分水荘の頃 「アルプ」

昭49・6

蛭田憲一郎 尾崎喜八先生を憶う 「回顧」（嘉納

忠明編 発行）昭50・2 非売品

大部俊郎 訪ねざる者の記 「回顧」

樋口 勉 尾崎先生と松目の俳句 「尾崎喜八詩

碑建立記念誌』昭55・8

白崎俊次 尾崎先生の思い出 「尾崎喜八詩碑建

『富士見高原—その詩その小説そして』（富士見高
原愛好会編）昭60 鳥影社

村山故郷 文人俳句の展望『文人句集書誌』昭60

万太郎俳句について（座談会・永井龍男他）「俳

句とエッセイ」昭48・10

歳時記・採録句

『最新俳句歳時記・春』（山本健吉編）

春分の入日笛子に今滾つ 行人

『同右・秋』

邯鄲やしらじら風の日もすがら 行人

『地名俳句歳時記・4甲信』（飯田龍太編）

渡辺 勝 尾崎喜八と俳句 「山火」平4・6

伊藤海彦 尾崎喜八への旅（その四） 「尾崎喜八

資料」10号、平6

小林わたる（瓦） 尾崎喜八先生と富士見 「山

火」平7・9

川崎斗城（精雄） 山友だちと俳句 「山火」平

8・1

川嶋利哉 穂屋野会のこと 「尾崎喜八資料」11、

12合併号、平8

名取正人 農村の復興に誠意を込められた尾崎

先生 「尾崎喜八資料」11、12合併号

村野夏生 鋸目すゞしき、孤愁連句集・行人穂屋

野歌仙、野の復活祭 「俳句未来同人」平10・

6、8、10

甲斐信濃谷の一重や春の鴨（春）

春雪に濡るるのみなる笛の原 尾崎喜八

ひこばえの振木の赤や雪の果 喜八

蓼科の道傾ける雪間かな（春）

ひこばえの振木の赤や雪の果 喜八

甲斐信濃谷の一重や春の鴨（春）

ひこばえの振木の赤や雪の果（春）

笛孔の漆の朱や草青む（春）

頬白のつぎつぎと立ち冬木原（秋）

はしばみを裂く山雀よ霧に濡れ（秋）

わが妻も藁沓遠き礼者かな（冬）

註・校異

生活改善優良モデル町村を見る 「読売新聞」（長

野版）昭26・11・13

新生活モデル部落 「信陽新聞」昭26・11・13

信每農業技術賞の三部落 「信濃毎日新聞」昭

参考図書

尾崎喜八とフランスの作家たち

—喜八宛書簡を通して— その三

中原好文

喜八宛ヴィルドラック書簡 (2)

前号に続き、本号でも、喜八宛シャルル・ヴィルドラック書簡を紹介する。一九二六年(大正十五年)七月十七日付けの長文の手紙一通である。

(その5)

「宛先その他」アメリカ経由。日本東京府豊多摩郡上高井戸原尾崎喜八様。封書。「発信地」封筒の裏側上部に、ch. Vildrac 12 rue de Seine, Paris (パリ、セーヌ街十一番地シャルル・ヴィルドラック)と書かれているが、封緘部には、ch. VILDRACT Route de Sainte-Anne SAINT-TROPEZ (Var)
「ヴァール県サン＝トロペ、サンタンヌ街道シャルル・ヴィルドラック」の印が捺されている。消印は21-7 26 (?) 以外は判読不能であるが、手紙はサン＝トロペの別荘で書かれ、その地で投函されたものであり、パリの住所は念のための添え書きであろう。

あなたは私があなたの素晴らしい詩にどれほど心を動かされたかお信じになれないでしょう。その詩は私がそれを見せた人々すべてにどれほど賞賛されたことでしょう。バザル・ジェット、デュメアル、アルコス、ジャン＝リシャール・ブロック等の人々です。私にはあなたのご存知ない友人が二人おりますが、この二人もあなたの詩の写しを呉れと申しました。私は一人に写しを上げ、ロマン・ロランにも長文の手紙を添えて詩の写しを一通お

いもので、何人かの友だちや親戚の人たちに会つただけです。私たちはずっと一夏を過ごすために、たいていいつでも燐々と陽光の降り注いでいる、この美しい地中海に戻つてまいりました。

一九二六年七月十七日
ヴァール県サン＝トロペ、ラ・メゾン・グラッシュュ(白い家)にて
親愛なる友
私がこの手紙を書いているのは、サン＝トロペの、葡萄畠と海を前にした、丘の上にあるプロヴァンス風のわが家からです。私たちのパリ滞在はほんのわずか、それも慌ただし

送りいたしましたが、手紙の中で日本における彼の友人たちや私の友人たちについて語りました。

私の日本滞在については多くの頁を書かねばなりません。こちらでも私はそのことを求められておりますし、それ以上に東京で人々は私にそのことを求めています（註1）。そうしようにも今のところ動きが取れないのです。この旅行から私が持ち帰った最も貴重なもの、それはあなたとの間に生まれたような様々な友情であり、私の頭と心に刻み込まれた様々な光景や影像であり、どのような所の人々とでも、互いに理解し合い、愛し合えるのだというこの幸せな確信です。確かにものとして認めねばならない最も大切なことは、様々な相違や特殊性ではなく、深い類似性です。でも皆が私から期待しているのは、私の会つた人々の中にある日本の固有性について私が述べることなのです。ところで、ロランの友人の方々が催してくださった少人数の夕食会（註2）で、皆さんと一緒に席に着いた途端私は心情的にも、精神的にも自分が兄弟たちと一緒にいるのだと感じ、そのことに胸を打たれ、あなたがたが日本人であるという事実は、それが他の様々な観点からすればどれほど重要なことであり得ようと、私にとつては二義的なことでしかなくなってしまったのです。

出来得れば確かめてみたいと私が思つたのは、日本における様々な社会問題の実相でした。それはまた、わが国同様、お国でも

実に恐るべき蔓延ぶりを見せているあの歐米的な野蛮さに對して、洗練された奥深い日本文明が、正しくはどのような状況下におかれているのかということでもあります。

ちの爆撃機や潜水艦や機関銃を誇らしげに自慢する蟻塚のような近代国家の姿なのです。

日本に関する文章を一、二篇書く中で、まづもつて私を魅了したことを持て強調しながら、恐らく、結論を出さずに、これらの情景をありのままに述べるつもりです。しかし出来るなら、日本の現下の状況について、とりが調和の法則に従つて一つに結び合わされねばならないのです（註3）。そしてあらゆる地方的な文明の糾となり得るような、ただ一つの世界的な文明の開化を期して待たねばならないのです。私たちすべての熱意ある文明人が、努力を向けるべきはこのことです。しかし、悲しいかな、今この時、すべての民族が先ず取りかかるとしているのは、ある種の狂気、ある種の迷蒙、ある種の不毛な欲望と喧騒への熱狂の中で手を結ぶことなのです。すべての民族がその努力を真の目的から逸脱させてているのです。日本文明はこの怪物から逃れ得る程十分な強靭さとがつしりとした骨組みを備えているのでしょうか？ 日本に関する印象をまとめようと試みて、私は数限りない矛盾に捕らえられています。今、私の目に映るのは、ある時には、ギリシア人たちの場合と同じような、単純で洗練された風俗や習慣を身につけた多くの職人や百姓や詩人たちからなる一群です。そしてまたある時に浮かぶのは、生産のための生産、利潤のための利潤に殺到する近代国家、餌食を狙う獰猛な他のあらゆる国家が転げ落ちて行きつつあるあの坂道に引きずり込まれてゆく近代国家、そしてそれ他の国家同様、自分た

さらにまた私は、リポーターではありますんし、ただ五、六週間過ごしただけの国について、たちどころに一巻の書物をまとめ上げることの出来るようなあの驚くべき人々の人でもありません。私の旅行について、とりわけ私が書きたいと願つてているのは、新聞用の記事ではありません。それは自然や人間を前にした時に見えるであろう幾つかの鮮明な

感動を定着させたような、何篇かの詩や散文詩のようなものとなるでしょう。

今この時、あなたはあなたのあの小さな家で——今でも非常にはつきりと目に浮かびます——何をしていらつしやるのでしょうか。あなたの麦畑は熟れて、もう刈り取られていることでしょう。地面は密生したきつね色の切り株で覆われているに違いありません。叔父さんは甥や姪たちと、そこで鞠遊びをすることも出来ましよう。美しい夏の宵、家の前の、私たちがコーヒーをご馳走になつたテーブルで、夜の食事を取るのはどんなにか気持ちの良いことでしょう。

あなたの素敵な贈り物の兜（サムライの帽子）はまだ届いておりません。それは次の船便で、フランスに帰国する絵画と一緒に着くものと思います。

私が焼き付けをした写真を何枚かお送りいたします。グレープ写真を、そこに写つているお友達のそれぞれに一枚ずつお渡しください。私のこの手紙についても皆さんにお知らせ頂ければと思います。皆さんの一人に手紙を出すつもりですが、皆さんそれぞれへの手紙はまた、いわば皆さん全員へのお手紙でもありますから。暫くしましたら、こここの家の写真を何枚か撮つてあなたにお送りいたします。

さようなら、親愛なる友よ。妻と私は、あなたと、またあなたの素敵な奥様と水野久枝さんに心からの挨拶をお送りいたします。片山、吉田、倉田、今井、上田の皆さんにも宜

しくお伝えください。

あの美しい大きな川のほとりに、今、一緒にいられないのが残念でなりません！

あなたの美しい娘さんに、私たちの代わりに忘れずにキスをして上げてください。日本には頗るキスをする習慣がありましたが、これだけは例外です！

あなたの忠実なる

シャルル・ヴィルドラック

もしもその方が好都合でしたら、英語でお手紙をくださつても差し支えありません、私の娘はとてもよく英語を話しますから。

娘のリュセットの小さな写真を一枚、とりあえず水野さんに同封いたします。

(註1) 日本旅行についてヴィルドラックが意図していたこの印象記は、翌一九一七年十二月に、パリのヘエミール・アザン社から、「わが人生の一章」という叢書の一冊として、『ある日本旅行から』と題されて出版された。

巻頭にはベルトルト・マーンの手になるヴィルドラックの肖像デッサン一葉が置かれ、巻末には、「浮動する、深い夢に満ちた一夜」で始まる喜八の詩「或る朝のおもい（シャルル・ヴィルドラックに）」三聯二十行のフランス語訳が付されている。この書簡で触れられているように、ヴィルドラックが感動し、その友人たちが絶賛したというのは、恐らく、この詩のことであろう。

(註2) この部分の原文は、au petit dîner des amis de Rollandとなつており、直訳は

「ロマンの友たちの小さな夕食会で」の意である。ソーダ・ファウンテンで催されたシャルル・ヴィルドラック夫妻訪日歓迎パーティーの際の写真解説（尾崎喜八資料 第10号表紙裏）によれば、パーティを主催したのは、「ロマン・ロランの会」であるとのことなので、この部分は「ロマン・ロランの会主催の小夕食会」としても構わないわけであるが、直訳しておくる。尚、その解説に見える、「ロマン・ロランの会」は、喜八が「或る会合」（尾崎喜八資料 第3号十七頁）で、「旧「大街道」社の延長、「ロマン・ロランの友の会」と記しているものと同一の集まりであろうと思われる。

(註3) 傍線の施されている部分は、喜八がヴィルドラックを囲む夕食会の席で述べた歓迎の辞からの引用である。

「世界のありとあらゆる要素が結び合わされ均衡を保つてゐるように、すべての民族が調和の法則に従つて一つに結び合わされねばならないのです。もしもこの調和が存在しないならば文明の開化の歴史というものは、理解しがたいものとなるであります。」

ヴィルドラックは、その『日本旅行記』において、喜八が「感極まつた面持ちで」歓迎の辞を述べたと記している。

(つづく)

研究会だより

尾崎栄子

尾崎の日記から

(昭和三十七年)

二月三日(土曜) 晴、夜曇

○今日午後は宅で行人会の誕生日祝賀会があるので午前中に用を済ます。それから今日の客のために色紙五枚(いずれも俳句)を書いた。実子は書斎や座敷での祝宴準備に勧いていた。美砂子も手伝っていた。

○午後坂本波之夫妻、長男の運転する車で先着、つづいて蛭田兄弟と小宮静雄君ら五人の行人会員がそろう。古稀の祝いとして同会からエリザの六〇〇倍顕微鏡一台を贈られる。まことに嬉しい。やがて座敷で祝賀の饗宴。一同さまざまのカクテールを造って飲む。馳走も豊富、最後は鰻の重箱。その間に私の四人の守護聖者(バッハ、ベートーヴェン、モーツアルト、ヘンデル)の音楽を聞く。午後六時頃閉会、一同上機嫌で各自私からの記念の色紙を持って帰った。今夜は節分、敦彦が豆まきをした。

二月四日(日曜) 快晴 立春

○昨日贈られた顕微鏡を装置して、家中みんなでプレパラートを見る。私は元よりだが、妻も孫達も栄子もみな喜んだ。私にとつては再び微視的世界の驚異と美とにひたる道がひらけたというものだ。この贈物を考えてくれた人の心に深く感謝する。

○昼飯後の一と時、実子、栄子、美砂子、前

野君らのために「立春」を詠んだ秀句十数句を講義してやる。一同喜んで聴く。後刻自分にも二句あり――

立春も夕日となりぬひよつぐみ (実景)
寒明けや土の香暗きもぐら塚 (庭実景)

○立春の日の記念に如露一個を買う。

御荷鉾文学碑の案内板

群馬県万場町の西御荷鉾山中にある尾崎の文学碑の脇に珍らしい案内板が建っている。それは一九八〇年に碑が建てられてから二年後に同じ永友会の手によって作られた。通常見受ける説明案内とは違つて、手作りの見るからに心のこもつた案内板なのである。新井正治氏が文を興し、大庭常三氏が筆をとり、今は故人となられた大工の田畠春巳氏の作で、材は家具や俎板等につかわれるシオジという木の厚い板で作られ、雨風に耐えるよう屋根がついている。その案内板の足元が朽ちて倒れたので今回永友会の皆さんのが道具を持って現地に登り、根継ぎをしてしっかり建てるおしたという便りとともに新井氏撮影の修理風景の写真が送られてきたので案内板の様子をご紹介する。年に何度か山に登つて碑のまわりの草を刈り碑を洗つたりして下さる方に感謝の気持をお届けしたい。その解説文は、尾崎喜八先生(一八九二—一九七四)は、「空と樹木」以来、自然と音楽をモチーフとした多くの詩集を生んだ自然詩人であり、人道主義(白権派)詩人でした。散文(紀行・隨筆)世界でも詩精神に貫かれた生活と自然

愛との協奏と、詩よりも、もつと自由に具体的に文学として樹立した他に比類のない人です。

先生の文集は、日本の自然の伝統(花鳥風月・人生詠嘆)の描写とは異なります。それは、先生の資性とも言える自然観察への関心と理



入る作品で、四十代後半に書かれたものです。

文章は既知の地質学の宝庫・神流川沿いのそこに佇む集落や御荷鉢山への憧憬が、科学的知識を根拠に融合昇華されて書き進められています。

石や木や草や小鳥や風や水や空や、昔日の集落・万場の町並みとそこに住む人の機微、遠望の山々を思う先生の情感の表出をしみじみと味わうことができます。

自然を愛し、音楽を愛し、科学を究め、文学を開拓した詩人・尾崎喜八先生の「神流川紀行」との出会いに感じ、その一節を刻み、文学碑として建立しました。」(以上横書き)

——一年のできごと 平成十一年八月まで

みずならの会

平成十年十月一日～四日、第十一回みずならの会は木曾路をめざした。奈良井集合、鳥居峠を往復し尾崎の文中の足跡を味わう。越後屋旅館の好意で尾崎宿泊時にしたためた色紙及び芳名録を見せてもらう。奈良井宿で一泊。二日目は寝覚の床→木曾福島を経て開田高原行。木曾馬牧場にある尾崎の句碑を見る。開田村西野で一泊、翌朝西野峠に登り快晴の木曾御嶽を堪能、車に分乗して御嶽中腹をドライブして木曾福島にて解散。一夜目は尾崎の散文「鳥居峠」を一同で輪読する。小宮静雄氏が押韻十四行詩「馬籠峠」について感想を述べられる。二夜目は伊藤和明氏の木曾御嶽の火山活動・活断層・地震等についてのお話。

担当幹事は堀隆雄氏、参加者二十五名。

『わが庭の寓話』刊

十二月三日、尾崎喜八訳及び文、ジョルジユ・デュアメル『わが庭の寓話』ちくま文庫にて刊。内容は前号で紹介すみ。

特別展「尾崎喜八と校歌」

平成十一年一月十九日より一月二十八日まで

長野県諏訪郡富士見町「高原のミュージアム」で行われる。尾崎が作詞した校歌の内、長野県下の学校から多数の自筆墨書の校歌詞を借り出して展示、二月二十一日には特別記念フ

オーラムが催された。第一部「校歌について語ろう」第二部「校歌を歌おう」。特別に参加された旧木曾高等学校同窓会有志による講演及び校歌（生徒会歌）合唱の披露があった。

蠟梅忌

二月十三日、東京青山のNHK青山スタジオで行われた。今回は会場の都合で第二土曜日となる。

伊藤和明氏の開会の挨拶。小林義郎氏が「尾崎喜八のハンス・カロッサ」について語られ、難波幸子さんはかつて鎌倉瑞泉寺に小山富士夫氏・高田博厚氏・草野心平氏・尾崎喜八が集い、お薄をいただきその後影茶屋で酒宴が催された時の話をされる。富士見町教育長小松睦示氏、学芸委員北村享一氏の「高原のミュージアム」に於ける尾崎関係の催しの報告。北海道から初参加の森正光氏のホームページ「尾崎喜八の世界」についての報告があつた。司会は野本元氏、参加者は五十五名。

「富士見に生きて」碑前祭

八月二十九日、「富士見高原詩のフォーラム——第20回尾崎喜八碑前の集い——」。於富士見町コミュニティ・プラザ。

十一月六日、「田舎のモーツアルト」音楽祭

場所南安曇郡穂高町立穂高中学校。碑前祭を兼ね生徒が中心になつて音楽を奏でる会にするとの事。所用時間約二時間。開始時間は未定。詳細ご希望の方は振込用紙の通信欄にご記入かまたは尾崎研究会にお問合せを。

*

鳥取県米子市在住の満嶋明氏が蠟梅忌を期して尾崎喜八詩集（昭43刊）全篇をホームページに載せ捧げて下さった。詩集が入手困難の折から有難いことである。

<http://www.bekkoame.ne.jp/~mann1952/>

*

「尾崎喜八とフランスの作家たち シャルル・ヴィルドラック」の書簡は、日本語訳を初めて手にして、ロマン・ロランからの二十通の書簡の中身に匹敵する重みのあるものと改めて感動させられた。

尾崎喜八資料・第十五号

一九九九年九月三十日発行・非売品
ISSN 0911-3339

発行 尾崎喜八研究会

鎌倉市山ノ内一九七一五ー(〒247-0062)
電話 ○四六七一三三一一七六一

振替 00270-2-33012 尾崎喜八研究会
印刷 住友出版印刷株式会社

『山の絵本』増刷

四月九日、岩波文庫『山の絵本』第八刷一千部増刷される。